唐土名勝圖會 京師 二

唐土名勝圖會第一集巻之二

目次

皇城全圖　目録

皇城

Todo Mei Sho Zukai

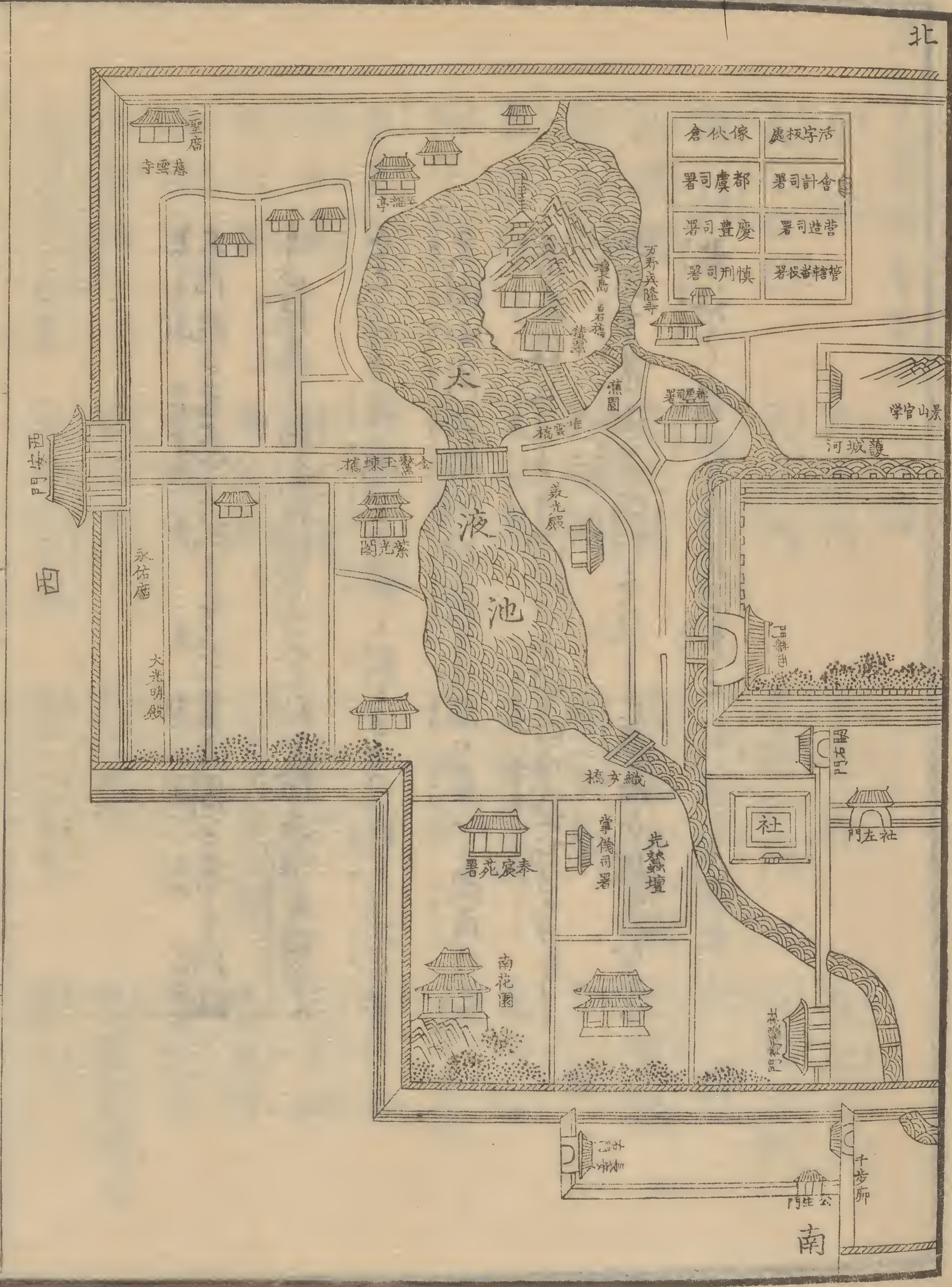
唐土名勝圖會

京師

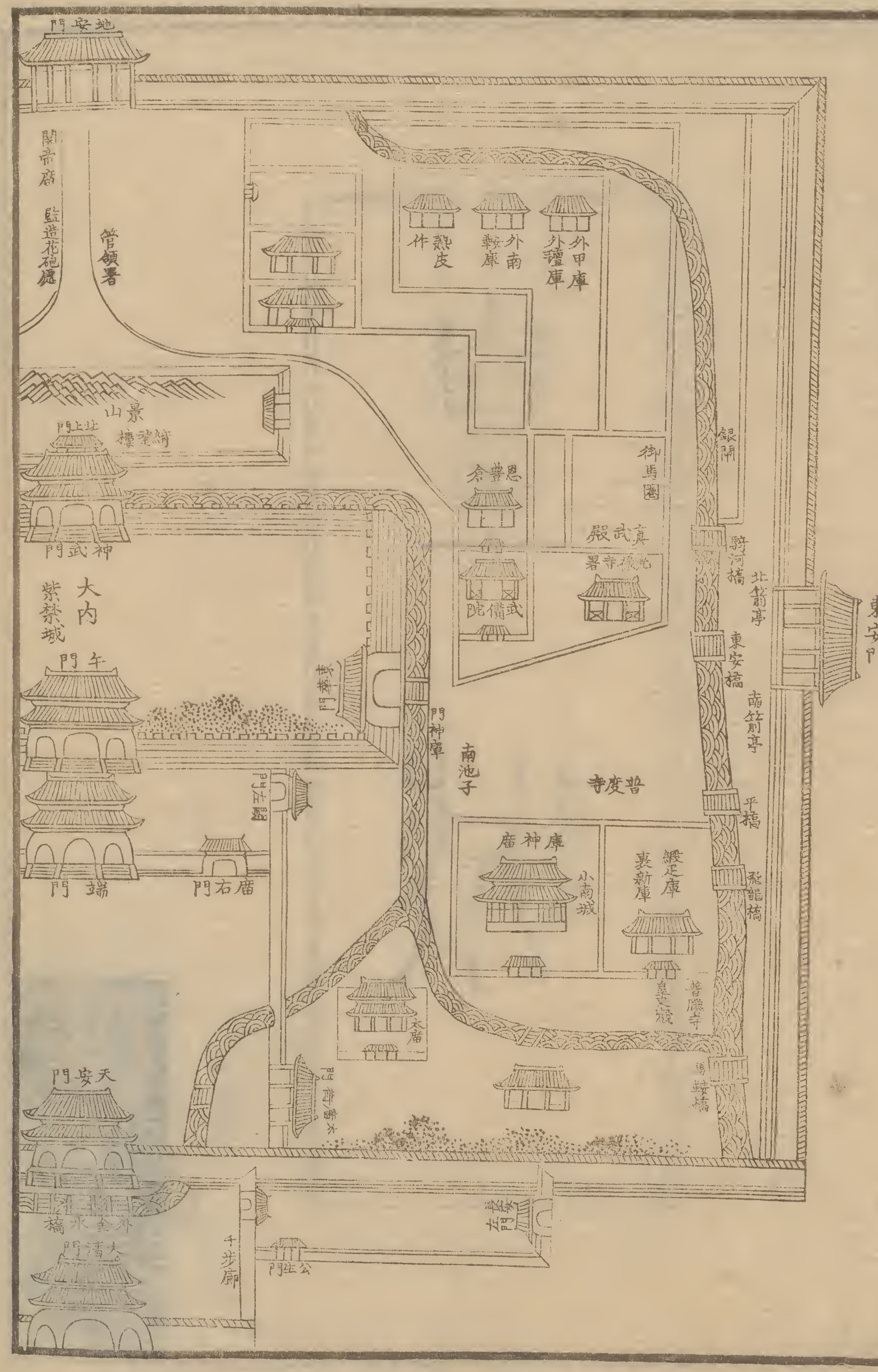
皇城

卷之二

皇城


北
太
液
池
紫光閣
社
先蠶壇
奉宸苑署
南花園
千步廊
南

皇城總圖


地安門
關帝廟
管領署
景山
神武門
大內
紫禁城
午門
端門
天安門
東安門
東
普度寺
南池子
御馬圈
真武殿
千步廊

大内既に第一巻に記とをれて爰に圖を省く内城まて後巻に圖を載れ故にこれを除き唯皇城のミをのせり其殿屋の形を圖するものハ皆寺署なり大街小街火巷胡同と稱する者ハ悉く商民の家居連續きてまちをなして尺寸の空地あることなし此圖中某街某胡同を記して民屋を圖せざるハ看誤て空地とするの勿れ

唐土名勝圖會巻之二目録

唐土名勝圖會卷之二

故兼葭堂木世肅先生遺意

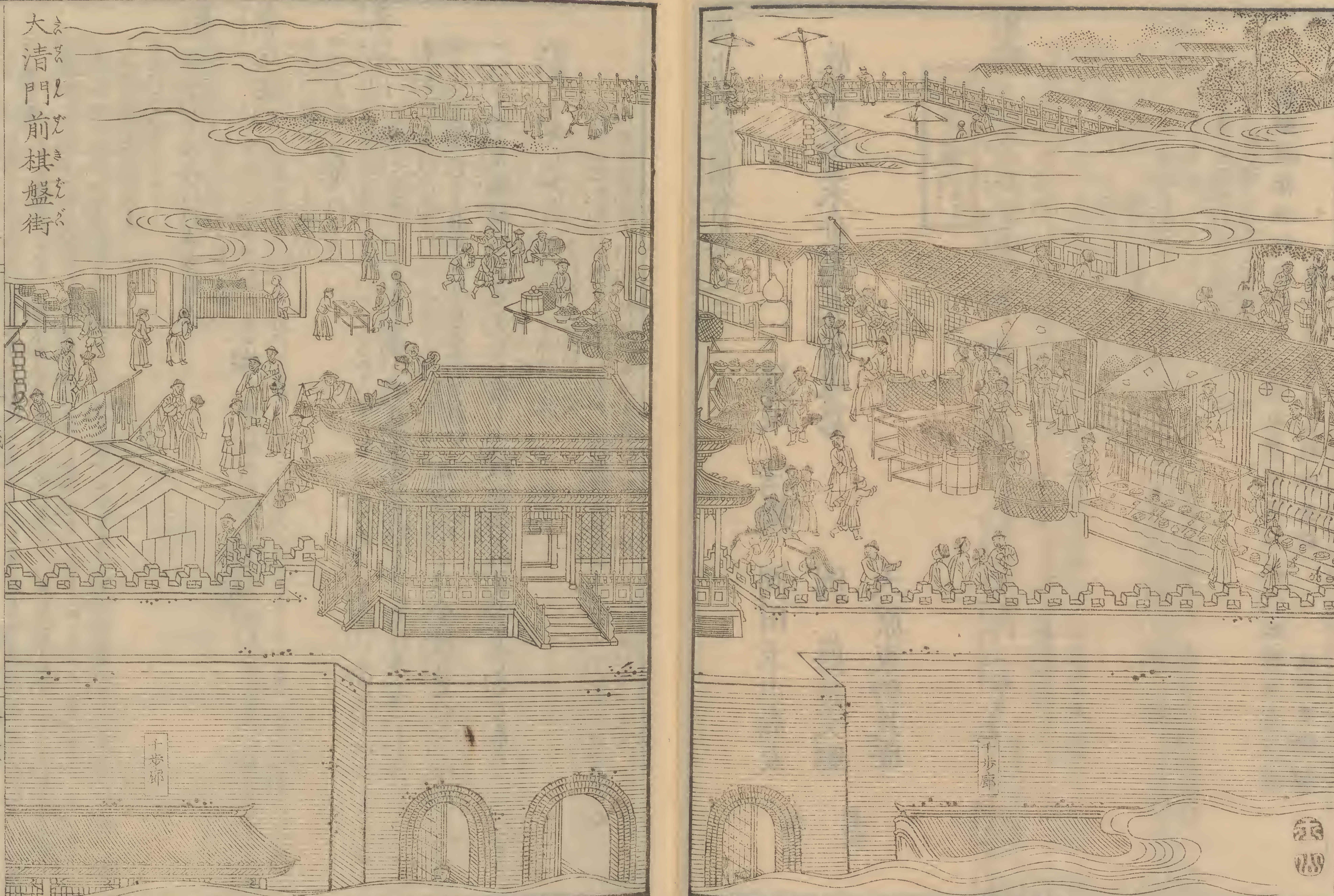
編述 法橋 岡田玉山尚友
岡 熊岳文暉 仝
大原東野民聲 畫

〇皇城

皇城は大内の外、京城の中に環らす廓なり。大門四、小門二あり。周十八里有奇。城の高さ一丈八尺。正中南面の門を大清門といふ。其の北に小門あり。長安左門といふ。東に向ふ。又西に向ふ小門を長安右門といふ。東の大門を東安門といふ。西を西安門といふ。北を地安門といふ。まさに南大清門の内に天安門あり。天安門の内に端門あり。端門の内左に闕左門あり。其の正中北は即ち紫禁城の午門なり。南大清門に対するを京城の正陽門といふ。

大清門 三闕飛檐重簷なり。門の前に廣闊正方地ありて内城の正陽門に接し、繞らすに石闌を以てし、已に圖するは廊をつらね梯する長廊ありてもろもろの貨物雲のごとく集まり、名て棋盤街といふ。明の代大清門を大明門といふ。棋盤街又天街ともいへり。月を翫ぶに宜しく涼暖の處とぞ。

査嗣瑮雜詠詩
棋盤街闊静無塵
百貨初收百戲陳
向夜月明真似海
参差宮殿湧金銀
鳴門書



唐土名勝圖會

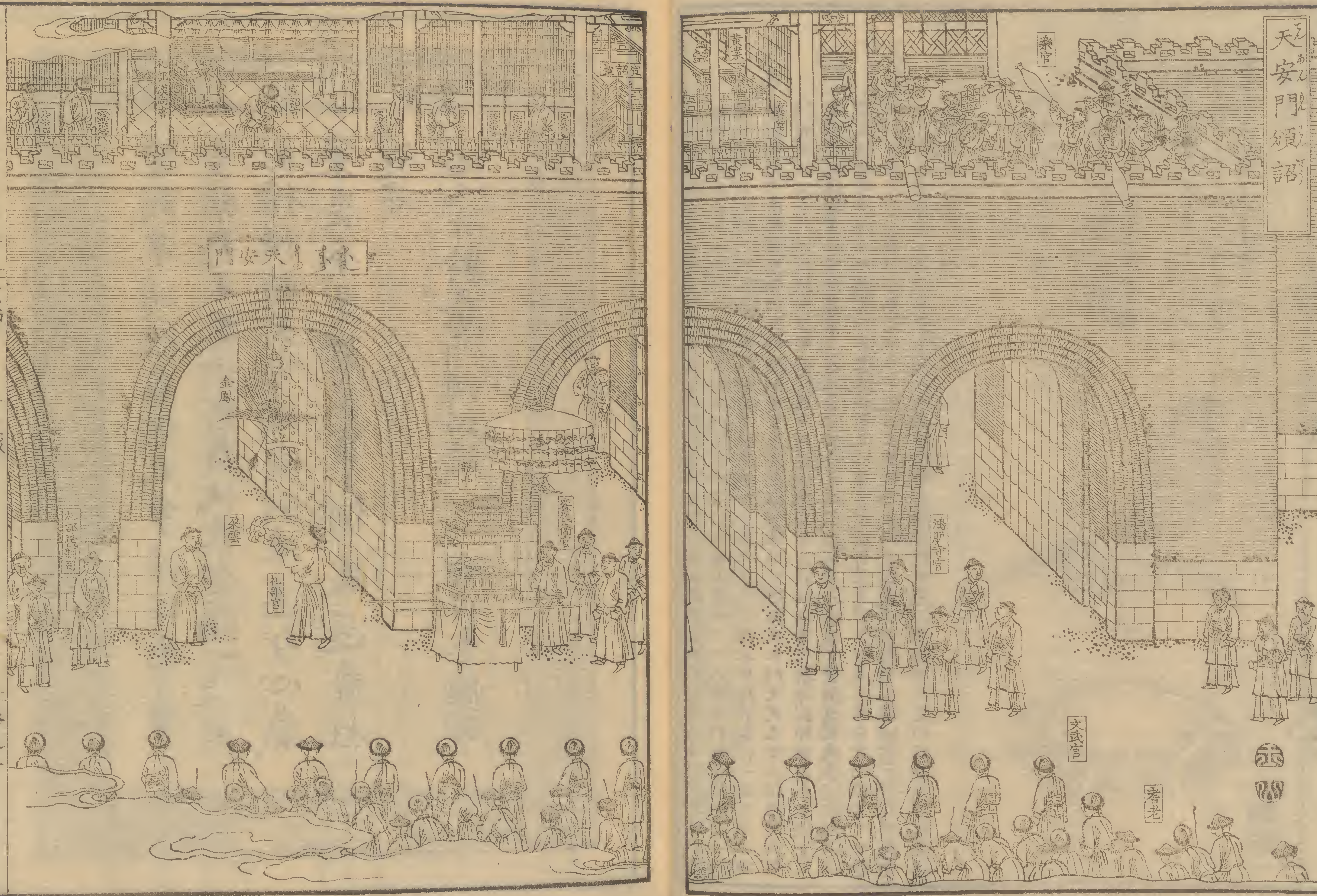
所圖述地已不可得躬詣事又不可得親訪則其於域欲識之風土景勝以博其智者也此其為必用不可廢之書者寧與彼諸圖繪可同日而論也乎哉刻者乞序因為題

享和四年春正月既望

皆川愿書

唐土名勝圖會序

爲唐土名勝圖會者世甫岑劍之玉山討論之圖象之雖吾東野左右之横撿有門序之日所譜圖名者畫象也圖象之不可缺已也其如是興勝發居吾既河濱發石勝發者也河圖洛書龜居之宋龍楞伽盧延之球地圖列于



天安門頒詔

雙闕平明煙霧開九重須詔出層
臺播懸木鳳銜書舞伏立金鷄下赦来
彩檟横時天宇濶黄封展盡聖心裁
策災本是賢良事何處還尋杜
谷才

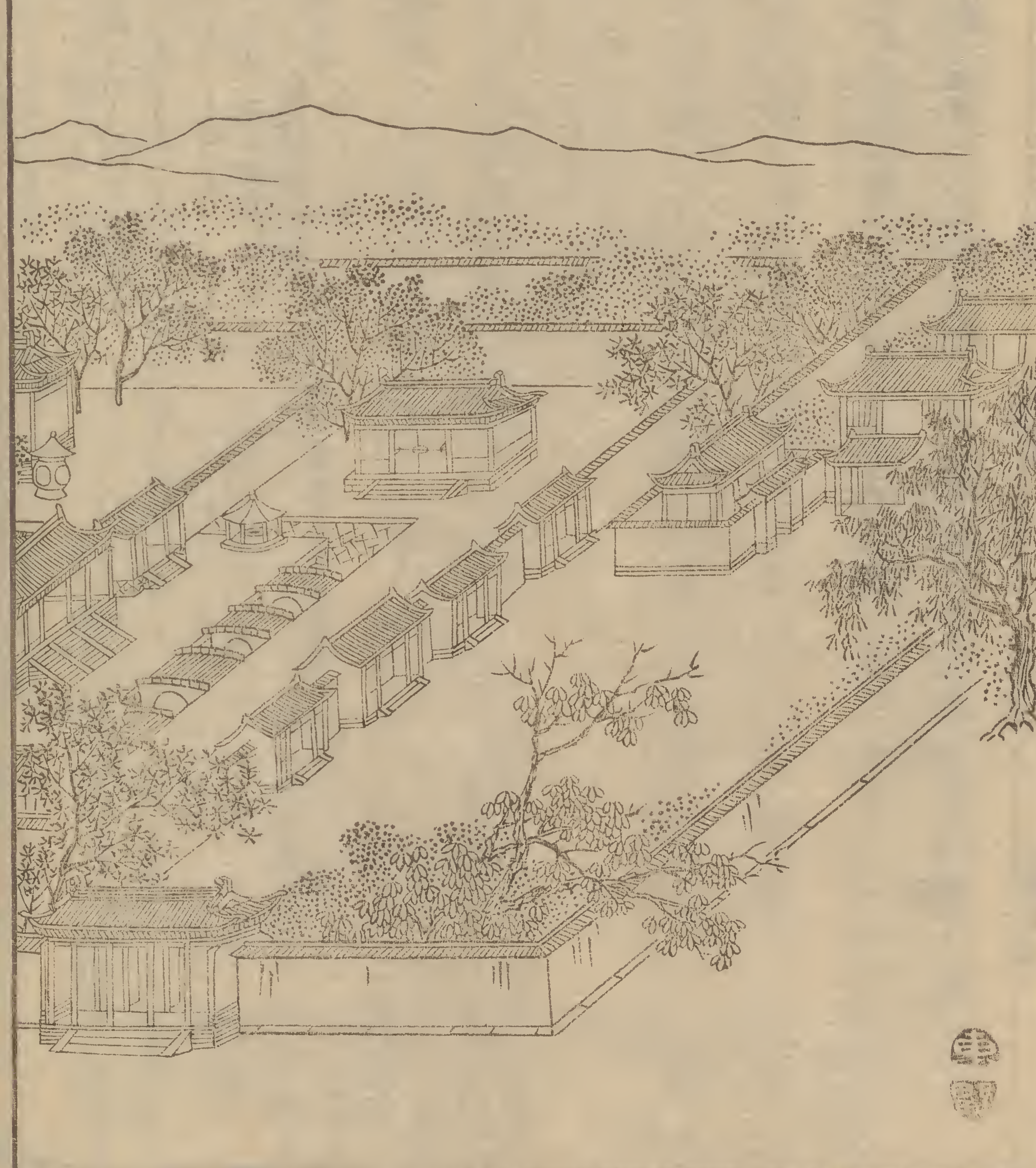
右毛奇齡天安門頒詔詩　皆川愿

○太廟街門　天安門の内東廡の正中にあり。○社稷街門　天安門の内西廡門の正中にあり。

端門　天安門の後にあり。門の制天安門と同じ。門内東西の両廡各〻間、其北の東に廟右門あり、西に社左門あり。是より北に又凡十二間の両廡あり。都察院寺府監等の諸官朝房とす。其廡の北の東に出る者を闕左門とし、西に出るものを闕右門とし、又門の外の東西両廡各三間、諸王公朝集の處とす。○凡八旗都統の會議は總て闕右門の外に集り、九卿會議揀選人員驗看月選官員は倶に闕左門の下に集る。○中書科直房　午門の外西廡の外にあり。○六科給事中直房　午門の外両廡にあり。東ハ吏戸禮の三科ハ西に向ひ、兵刑工の三科ハひがしに向ふ。雍正二年始めて六科を以て都察院に隷く。吏科の北に聖祖康熙皇帝御製御書の臺省の箴に満漢文の碑あり一通なり。

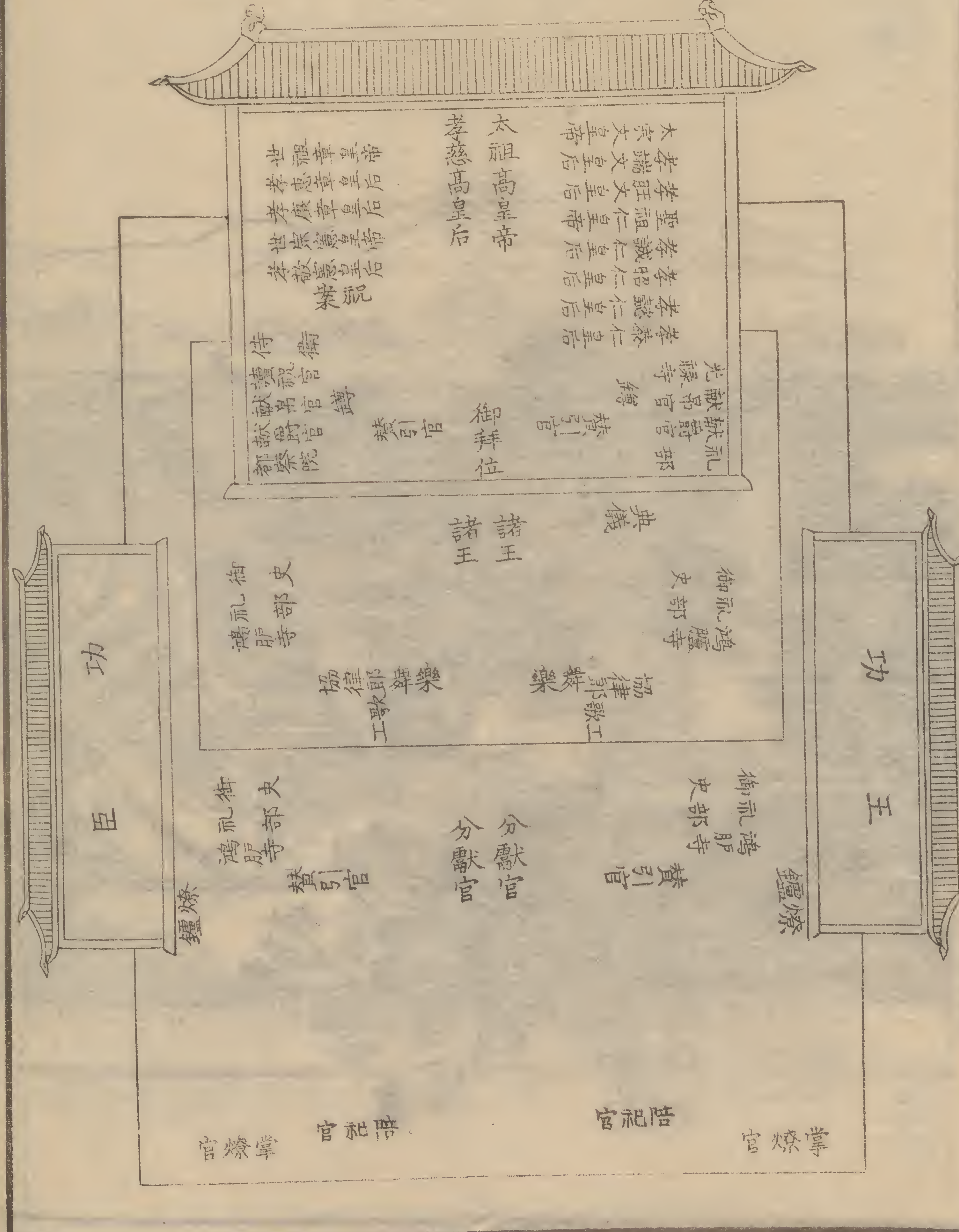
太廟　闕左門の東にあり。南に向ふ。朱門丹壁黄瓦。又黄琉璃の瓦を以て覆ふ。衢に宗垣あり。周二百九十一丈六尺。大門三、左右の門各一、戟門ハ又間、宗基石闌中三門、前後均く三出の陛あり。門の内外に戟をつらぬること百有二十、左右の門各三間、等く一出の陛あり。戟門の外東西に井亭各一、前は石梁五を跨ぐ。前殿　廣十有一間、縱ハ四丈なり。沈香木を柱として正中三間、棟梁ハ金を以て飾り、陛ハ三成、繚すに石闌をもってし、正南及び左右の陛凡て三成ハ上級二成ハ又級三成ハ中十有一級左右各九級。凡て歳暮大祫の日ハ王公二人各宗室官を率ひ、中殿後殿に安ずる神位を前殿に移し、列祖及び列聖列后の神位を前殿に合せ祀せ給ふ。又時饗にハ中殿の神位のミを此に奉じて、祧廟の主ハ其所にて與ず。

太廟（たいびやう）





太廟前殿時饗配位圖



太廟前殿時饗陳設圖



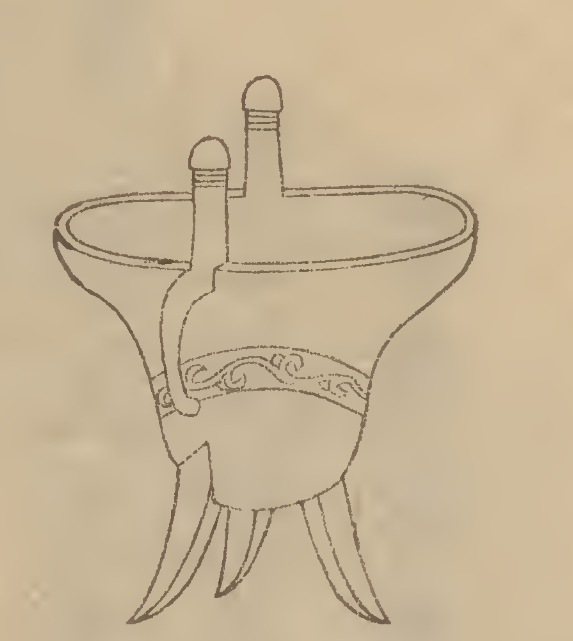
此陳設の圖ハ毎歳四季の孟月ニ行ハるゝ時饗食の期前殿の正中南向ニ奉安せる太祖高皇帝孝慈高皇后の神位ニ供しまうる器具なり又此殿の東西ニ配饗せる太宗世祖聖祖世宗の神位ニ供する饌式も大概此南向の陳設ニおなじかるべし

東廡ニ祀る功王の饌ハ此よりも簡なり又西廡の功臣ハ祀る所東廡よりも又簡之今爰ニ南向の陳設を挙て其余を畧ス委しくハ大清會典を考ふべし陳設の祭器籩豆簠簋登のたぐひハ次の圖を観して清朝の制を知らしむ

太廟陳設祭器

玉爵

通高五寸三分深二寸四分兩柱高九分腹為藻紋三足相距各一寸六分高二寸一分



鉶

範銅為之兩耳及緣飾以金高四寸一分深四寸口徑五寸一分底徑三寸三分三足高一寸三分用青色甆兩耳為犧形口繪藻紋次回紋腹繪貝紋蓋高二寸五分繪藻紋回紋雷紋上有三峰高一寸飾以雲足紋同



登

用黃色甆通高六寸一分深二寸一分口徑五寸寸校圍六寸六分足徑四寸四分口為回紋中為雷紋柱為饕餮足為雷雲紋蓋高一寸八分徑四寸五分項高四分上為星紋中為垂雲紋口亦回紋



簠

木質髹以漆塗金四面飾以玉通高四寸六分深二寸六分口縱六寸四分橫八寸底縱五寸一分橫六寸四分蓋高一寸四分口縱橫與器同上有稜四周縱六寸四分橫八寸面為夔龍紋束為回紋足為雲紋兩耳附以夔龍蓋紋與器同



簋

木質髹以漆塗金四面飾以玉通高四寸二分深二寸一分口徑七寸二分底徑六寸蓋高一寸八分徑與口徑同上有稜四出高一寸一分口為回紋腹為金飯紋校為黻紋足為星紋兩耳為夔龍蓋紋與器同稜為垂雲紋頂周為回紋中為雲紋



豆

木質髹以漆塗金三方飾以玉通高五寸五分深二寸口徑四寸九分校圍二寸足徑四寸七分蓋高二寸二分徑與口徑同頂高五分腹為垂雲紋回紋校為波紋金飯紋足為黻紋蓋為波紋回紋頂為綯紐高六分



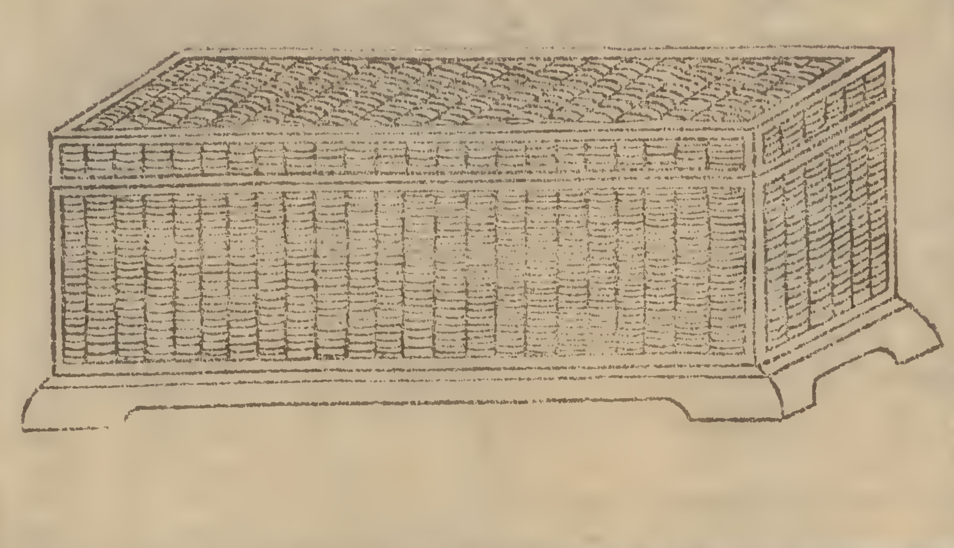
籩

編竹為之以絹飾裏頂及緣皆髹以漆黃色口繪雲紋通高五寸二分深九分口徑四寸四分足徑四寸一分盖高一寸八分徑與口徑同頂高五分頂緣漆色與器同



篚

編竹為之四周髹以漆黃色高五寸縱四寸九分橫二尺二寸五分足高七分蓋高一寸一分



前殿両廡　前殿の左右にあり。各十有五間。東廡は王公の位を配饗し。西廡は功臣の位を配饗す。又東廡の前西廡の南に燎爐各一あり。

中殿　広九間堂を同ふして室を異にす。内には列聖列后の神龕を奉す。中室には太祖天命高皇帝。孝慈高皇后の神位を奉安し。左の一室には太宗天聰文皇帝。孝端文皇后。孝荘文皇后の神位を安し。右の一室には世祖順治章皇帝。孝恵章皇后。孝康章皇后の神位を安し。左の二室には聖祖康熙仁皇帝。孝誠仁皇后。孝昭仁皇后。孝懿仁皇后。孝恭仁皇后の神位を安し。右の二室には世宗雍正憲皇帝。孝敬憲皇后の神位を安し。皆く几を設。玉冊玉宝の筺を連ね並に牀褥衾枕椸枷帷幔を設け。事ふる事生るがごとし○中殿の後に墻垣をもつて界とす。中三門。左右に各一門閾と後殿とに。

後殿　殿の制中殿と同じ。祧廟の神龕を奉安す。中室には肇祖原皇帝。原皇后の神位を奉安し。左の一室には興祖直皇帝。直皇后の神位を安し。右の一室には景祖翼皇帝。翼皇后の神位を安し。左の二室には顕祖宣皇帝。宣皇后の神位を安し。其ゐ事る如きの儀中殿に同じ。

中殿後殿両廡　各五間。等しく祭器衣物を収む。後殿東廡の南にあり。燎爐ひとつあり。

神庫　戟門の前石梁の東南にあり。

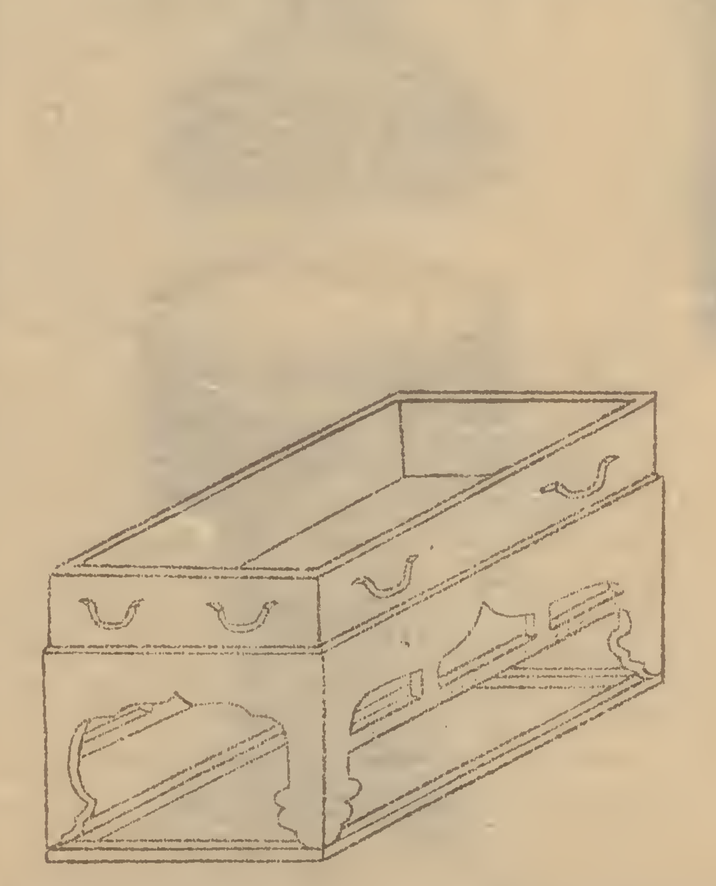
神厨　神庫の西にあり。

宰牲亭　廟門の東南にあり。○廟の西南は即太廟街門。西小門は即太廟右門なり。皆西に向ふ。○附饗食と称る者は毎年正月上旬。四月。七月十月の朔日に行ふて祀を享ふなり。大祫と称るは歳の除日前一日に行ふ大祭なり。

凡饗太廟之礼時饗之日恭奉後殿列祖列后神位於殿中宝座皆南嚮奉中殿列聖列后神位於前殿宝座太祖位南嚮列聖以昭穆序東西嚮前殿皇帝恭詣行礼後殿遣官将事帝后同案皆牛一羊一豕一簠二簋二籩十有二豆十有二鑪一鐙二各帛一登一鉶一尊一玉爵三金匕一金箸二帛共篚牲共俎尊實酒疏布冪勺具東廡五案皆牛一羊一豕一簠二簋二籩十豆十鑪一鐙二各帛一鉶一爵三共尊三西廡九案皆羊一豕一簠一簋一籩四豆四鑪一鐙二各帛一爵三共尊五帛各實於篚牲俎尊酒冪勺具大饗前一日樂部設中和韶樂於前殿第一成階上分左右懸祭日鑾儀衛陳法駕鹵簿於

俎

以木為之髹以漆青色中虚錫裏四周各銅環二四足有跗縦二尺三寸横三尺二寸通高二尺三寸実以特牲



犧尊

範銅為之作犧形尊其上高四寸八分口徑三寸三分腹圍一尺三寸五分四面有稜為回紋夔龍底徑二寸六分蓋高一寸一分徑與口徑同上為垂花紋下為夔龍紋高五寸一分長八寸三分孟春時享用之



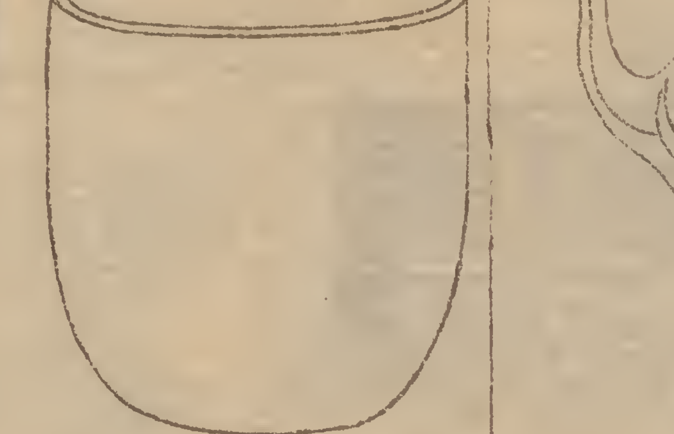
象尊

孟夏時享用之



著尊

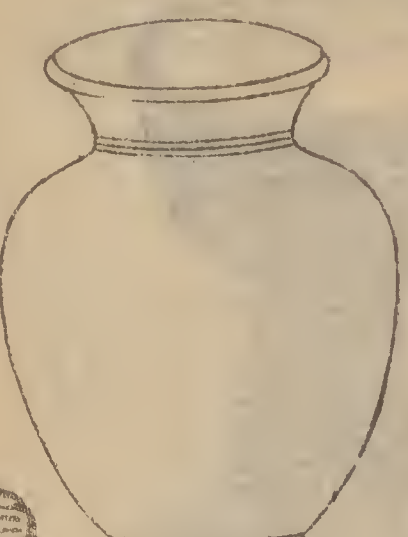
孟秋時享用之



壺尊

孟冬時享用之

以上制之大小花紋等略之詳于大清礼器圖式



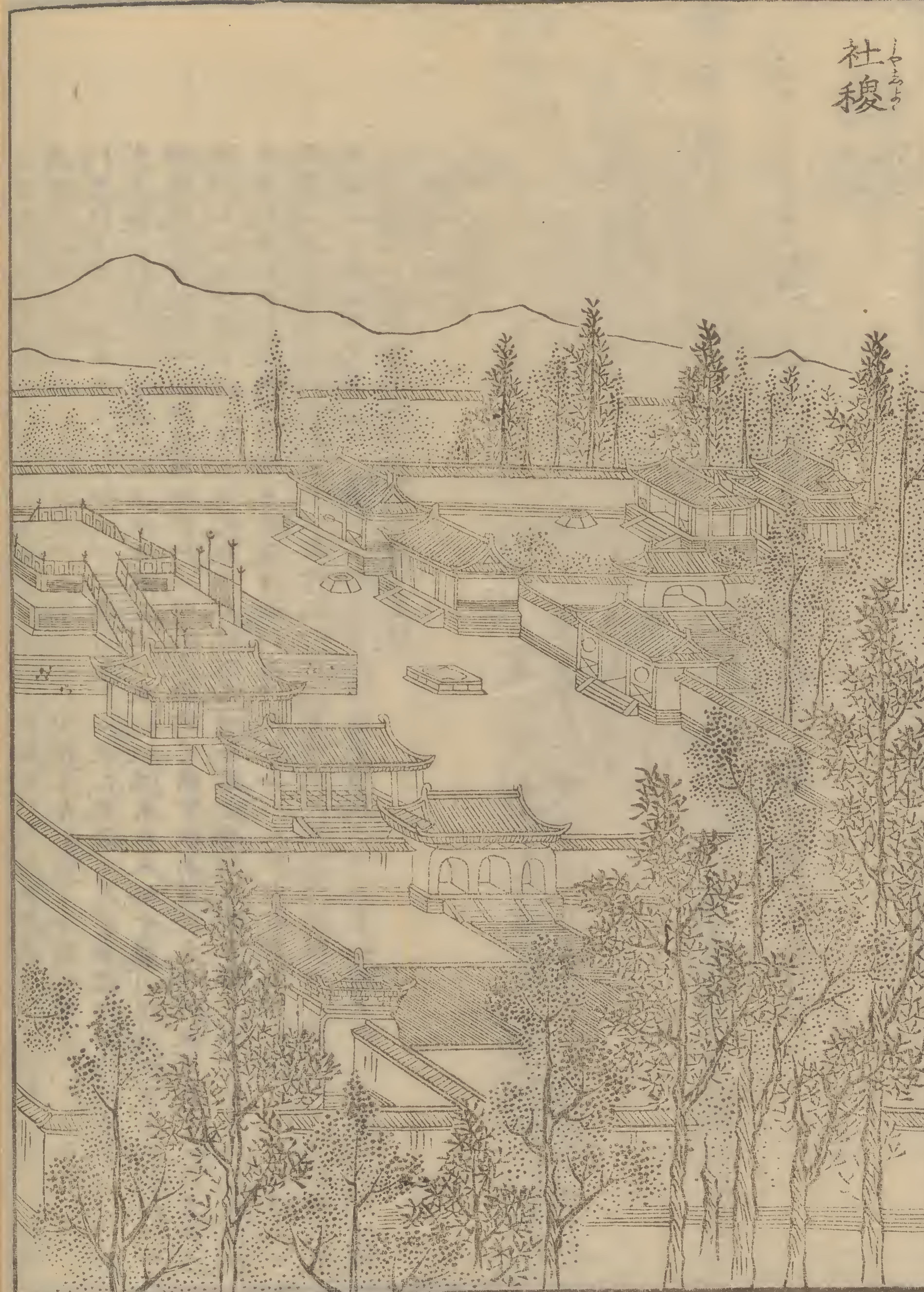
午門外金輦於太和門階下。日出前四刻太常卿詣乾清門告時。皇帝御祭服乗禮輿出宮。内大臣侍衛前引後扈如常儀。至太和門階下。降輿乗輦。駕発警蹕。午門嚴鼓。法駕鹵簿前導。不陪祀王以下文武各官咸朝服跪送。導迎鼓吹設而不作。皇帝由太廟街門左門入至外垣南門外神路右降輦。賛引大常卿一人恭導。皇帝由太廟南門左門入至戟門幄次。公一人率覚羅官詣神位。安奉殿中宝座。王一人率宗室官詣中殿上香行礼。恭請神位安奉前殿宝座畢。太常卿奏請行礼。皇帝出幄次盥洗。賛引太常卿恭導皇帝由戟門左門入陞左階入前殿左門就拝位前北嚮立。太常賛礼郎引分献官至階前夾甬道立。鴻臚官引陪祀王公位殿外階上。陪祀百官位階下。左右序立均北面。典儀官賛楽舞生登歌執事官各共迺職。武舞八佾進。賛引官奏就位。皇帝就拝位立。迎神。司香官各奉香盤進。司楽官賛挙迎神楽奏貽平之章。賛引官奏詣香案前。恭導皇帝詣太祖高皇帝香案前。司香官跪進香。賛引官奏跪。皇帝跪。奏上香。皇帝上炷香。次三上瓣香。興以次詣列聖香案前上香儀同。奏復位。皇帝復位。奏跪拝興。皇帝行三跪九拝礼。王公百官均随行礼。奠帛爵。行初献礼。宗室司帛官奉篚。司爵官奉爵各詣列聖列后神位前。奏敉平之章。舞干戚之舞。司帛官跪奠帛三叩。司爵官立献爵奠正中。皆退。両廡分献官上香。執事生奠帛献爵各如儀。司祝至祝案前跪三叩。奉祝版跪案左。楽暫止。皇帝跪。群臣皆跪。司祝読祝畢。奉祝版詣太祖神位前跪安於案。三叩退。楽作。皇帝率群臣行三拝礼。興。楽止。武功之舞退。文舞八佾進。行亜献礼。奏敷平之章。舞羽籥之舞。司爵官献爵奠於左。儀如初献。行終献礼。奏紹平之章。司爵官献爵奠於右。儀如亜献。両廡畢献儀如初。楽止。文徳之舞退。太常官賛賜福胙。光禄卿二人就東案奉福胙。進至太祖位前拱挙。降立於皇帝拝位之右。侍衛二人進立於左。皇帝跪。左右執事官咸跪。右官進福酒。皇帝受爵拱挙。授左官。進胙受胙亦如之。三拝興。率群臣行三跪九拝礼。徹饌。奏光平之章。徹饌畢。太常官跪告礼成於神。三叩退。挙還宮楽。奏乂平之章。皇帝率群臣行三跪九拝礼。有司奉祝次帛次香恭送燎所。皇帝轉立拝位旁西嚮。候祝帛過復位。楽作。祝帛燎半。奏礼成。恭導皇帝由戟門左門出。先是於皇帝入戟門幄次時。太常賛礼郎二人引後殿承祭官。至殿垣門右東面立。俟皇帝入戟門。賛引官引後殿承祭官入右門升自右階至殿外中階拝位前北面立。典儀官賛執事官各共迺職。賛引官賛就位。引承祭官就拝位立。司香官奉香盤進。賛引官賛詣香案前。引承祭官由殿右門入。詣香案前。司香官跪奉香。賛引官賛跪。承祭官跪。賛上香。承祭官上炷香。次三上瓣香。興。以次詣各香案前上香儀同。賛復位。引承祭官出殿右門復位。賛跪叩興。承祭官行三跪九叩礼。奠帛爵。行初献礼。覚羅司帛官奉篚。詣案前跪奠帛三叩。司爵官奉爵立献奠正中。皆退。司祝至祝案前跪三叩。奉祝版跪案左。承祭官跪。司祝読祝畢。奉祝版詣正中神位前跪安於案。叩如初退。承祭官行三叩礼。次亜献。司爵官献爵奠於左。次終献。司爵官献爵奠於右。均如初献儀。承祭官行三跪九叩礼。有司奉祝次帛次香恭送燎所。承祭官轉立西旁東面。候過復位。祝帛燎半告礼成。引承祭官仍降自西階由戟門右門出。王公二人率宗室覚羅官恭請前殿神位還御中殿寝室。後殿神位還御後殿寝室。上香行礼如前儀。皇帝至外垣南門外神路右陞礼輿。法駕鹵簿前導。導迎楽作。奏祐平之章。皇帝回鑾。王公従各官以次退。不陪祀王公百官朝服於午門外跪迎。午門鳴鐘。王公随駕入至内金水橋。恭候皇帝還宮。各退。

○歳暮大祫日之礼。以繁略之。

社稷壇 闕右門の西にあり。北に向ふ。壇の制方にして二成。高さ四尺。上成は方五丈。下成は方五丈三尺。陛四出。各四級。皆白石なり。上成は五色の土を以て方位を辨じて是を築き。内壝方七十六丈四尺。四色の瑠璃甎を以て是を飾り。又陛四級。西壝へ瓦を以て門となり。北方に一門あり。皆櫺楣を白石をもてつくり。扉は朱櫺なり。内壝の西北に瘞坎ふたつあり。

拝殿 戟門 壇の北にあり。拝殿五間。戟門の内外に七十二の戟をつらね。殿後に黄琉璃の瓦を覆ひ。殿後に三の陛あり。毎歳春二月。秋八月上の戊の日。天子親ら壇に登り。太社。太稷の神を祭り給ふ。

祭社稷禮以繁略之


社稷（しやしよく）



神庫　神廚　俱に内壝の西南にあり。壇垣　周二百六十八丈四尺、内外ともに丹艧（そとハ瑠璃）の瓦をもつてし、北ハ三門、東西南の三方ハ各一門あり。

宰牲亭　西門の外にあり。又井一あり。正門　壇の北門外東北の隅にあり。正門一、左右門各一。○東南ハ社稷街門、東北ハ即社左門なり。

○皇史宬　内南城の南にあり。列聖の實錄、聖訓及び玉牒を蔵る所にして、乾隆帝御製の詩并に碑あり。明の嘉靖十七年秋七月、命じて皇史宬を重華殿の西に建、金匱石室を其中に蔵めんと欲し、閣館の諸臣に勅して、重て九朝の寶訓實錄を書せしめ、此に蔵めしむ。淸朝これに依て又實錄寶訓を蔵る所とす。鐫歷門　左右小門の名なり。鐫の字、順治帝の御製に書くして、即龍の字と同じ。○緞疋庫　庫神廟（内東華門の外、小南城にあり。）重華庫と名く。雍正九年重修の碑あり。

小南城ハ明の英宗皇帝の御座せし南内にて、永樂中に所謂東苑なり。永樂十一年五月端午、帝東苑に幸ましく、撃毬射柳を觀、群臣に詩を賦せしめ宴を賜ふ。

明王直端午憶去年從幸東苑詩

千門晴日散祥烟。東苑宸遊憶去年。玉輦乍移雙闕外。彩毬低度百花前。

雲開山色浮仙仗。風送鶯聲繞御筵。今日獨醒還北望。何時重咏柏梁篇。

射柳の戯ハ瓢に鴿を入れ、瓢を葫蘆あるひハ盒の中に鴿を入て遠く柳の枝にこれを懸、遠く乗て是を射る。中る時ハ盒を射開き中なる鴿を傷らずして飛で空中を揺るをもて楽とす。○明の宣德中、此東苑に一の小殿を設く。宣宗帝崩じ給ふ和らげ其殿のさままでも抑じめり。深林擁翳の蓋、本造りまで茅をもて上を覆ひ、朱闌玉階の輝しきを引かへ、めぐりに懸る抑じしまも工巧を前あり。りを用ひ宸衷に流るる風睛して建らるゝ。殿の西には細き道あり。めぐりくして荊扉に入る。

前に清らかなる流水ありて石を甃て川となせり。門の南の方に小橋を架、上に葉ぶきの亭を設け、西と東に橋に挟んで又茅葺の亭を建、其下ハ清流めぐりて、激瀬の潺湲るさま、いはん方なし。殿の東に齋あり。是清頤齋と号けて書を讀の所なり。西に軒あり。其後ハ蔬菇秫瓜のたぐひおのが徑に生ひ繁り、後朝暮を編む所の籬を編ミ、其下にハ蔬菇秫瓜のたぐひおのが徑に生ひ繁り、艦とうりものふりたるさままでも宛も農家の君のありさまにかはる事なし。凡て殊しうり係る佳なる風情まことに目覚る心地し給ふなるべし。小南城ハ東苑の中にあり。明の英宗帝の御座ありし所なり。曽て英宗帝北狩し給ふて後、景帝位に即きたまひ、小南城にありし宮殿の石闌干及び旧園の樹木を内宮に命して悉伐しめ隆福寺を造營し給ふ。英宗帝北狩より還り給ひ甚だ惜り抑じめし、後内宦陳謹なる者を獄に下し、再び殿閣を増し離宮とて多く建させ給ひ、其宮殿ごとの後に小き池をかまへ、小橋を跨させ、池の水後すべて旧の石檀を設け、松樹檜木を多く植、其花果なる物、殊数十一種せり。後の一殿には古佛を供し、左右の廻廊ハ内殿に通し、すべて大内の式に倣ふて、いとうるはしく建らるゝ。これを南城と稱し、東苑今廢して既に年あり。

○飛龍橋　内南城にあり。玉河に跨る。明の飛虹橋の遺址なり。○皇史宬の西、觀心殿射箭所とて橋南ハ則嘉樂館なり。其北に丹鳳門あり。門外に金獅二を列ね、門内正殿と龍德殿とふ。左右に配殿あり。其正殿の後ハ即飛虹橋なり。此橋石をもつて造りなし、龍魚水族を刻りものせり。精工甚妙なり。他ぞ是其至たり得ざる。

明朱維京度飛虹橋詩

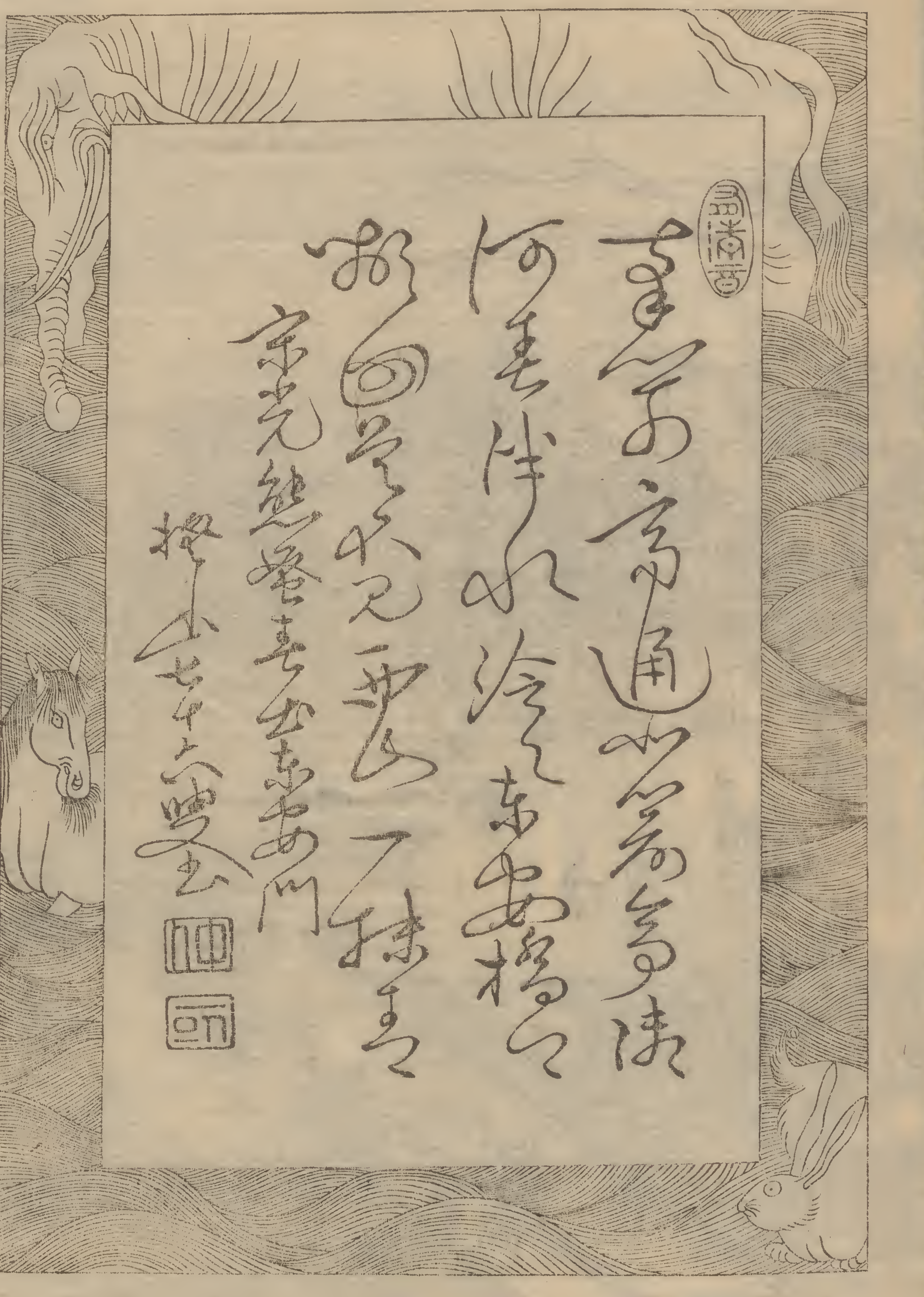
鯨海遥涵一水長。清波深處石為梁。平鋪碧甃連馳道。倒浮銀河入苑墻。

晴綠乍添垂柳色。春流時泛落花香。徵茫迴隔蓬萊島。不放飛塵入建章。

荒井公廉書




飛龍橋（ひりうきやう）



飛龍橋の北に二の坊あり。飛虹戴鰲の額あり。姜立綱が書なり。此北に山あり。山下に一の洞あり。額を壽岩といふ。又磴道をまうけたれば上に乾運殿あり。左右に凌雲亭・御風亭の二亭あり。小石を以て累ねし處蘿苑寺の籬のごとく築り。

○普度寺 裏彰庫の北にあり。明の南城蓋宮の遺址なり。康熙年間にこれを建りて瑪哈噶喇の廟となし。乾隆四十一年、普度寺の額を賜ふ。○國初睿親王府なり。後に寺と改む。今寺の庭に慈護法佛殿あり。内に鎧甲弓箭などを收む。皆睿親王の遺物なり。○明の南内に洪慶宮といへるあり。番佛を供ふる所なり。彼番佛とは即瑪哈噶喇なり。親王邸に入せ給ひし時尚此佛像を存し。其後因て廟を建るものならん。

瓊蕊庫 蕃乃東の地名なり。巷口に石獅二ありて河巷に傍く。南北に両涯あり。内に玉河橋の尾房あり。蓋しへの庫房なり。

○馬鞍橋 繖疋庫の東南。普勝寺の東北にあり。

○南薫亭 馬鞍橋河の東にあり

○平橋 東安橋の南にあり

東安門 皇城の東。拱の南にあり。大内の東華門と相對す。

○東安橋 東安門の内。大街にあり。○内は宮仕する宦者勤め選まれて内官に奉る者は東安門より進み東安橋をとほるに、此よりして日々に朝参を嚴く限りなき榮耀を極めしが、此橋を經て皇恩橋といひ、凡宮中に仕へる宦官此媚御したるは寵偶の厚きに衰て、君恩のかずかずけなきを忘れゆへ宦官は皆厲になりて猶父母の妻き孤悪む依て京師の俗、皇恩橋をけがして忘恩橋とよぶなり。

○光祿寺署 東安門内大街の北にあり。堂の額を敬慎有節といふ。雍正帝の宸翰也。凡光祿寺の掌る所は、祭享・宴勞・酒醴・膳羞の事を掌るなり。大官署・珍羞署・良醞署・掌醢署等の役所ありて、これ肉膳羞及び燕饗饔餼の需を掌る。光祿寺に屬し、犧牲・酒醴・果蔬の物を分ち掌り、壇廟及び奉先殿、其餘すべての祭祀に牲を剣肉を陳爵を主り、膳を進む。或は萬壽聖節・元日・除夕・或は成婚・下嫁の筵宴、其外大内に行ふ燕饗食、大小となく都て饔餼のことをあづかり掌る。○寺といひ院といへる皆役所のことなり。原番僧の入朝せしときの寺署

東安門（とうあんもん）
東安橋（とうあんきやう）





に益しより今ハ佛場僧室を寺院とは云り。○署中に織李本の酒搾あり。院萬三が家物なりと云
傳へ搾ごとに米二十石を費すところの酒百甕に満りと云。○糟房あり。七層にして南に向ふ。其南に
御酒房長春房あり。花季乃花を採りて酒を醸して若酒房あり。貞一酒を造る所なり。○門と云ふ門
とふ内に如水軒・旧星堂あり。後の宅地に翁の骨を瘞む所あり。○明の張元易光源寺の署中に竹と
棟とう。今は甚蕭索せり。黎惟敬
秘書を以して額して紫禁滄洲と云。

○南池子 東華門の外、東南にあり。○鞍作 作 南池子の後、御の南にあり。○外養牲處 南池子の南にあり。

○门神庫 南池子の西北にあり。明の玉芝宮の地なり。嘉靖間世宗皇帝玉芝廟の東に以て廟を建て興獻帝を祀り、號して門に十年に本廟の後に芝芳を分け玉芝宮といふ。今ハ地界を以て考ふるに、門神庫は玉芝宮の地なり。

○武備院署 東華門外北長街の路北にあり。廳どろに庫あり。甲庫と云。氈庫と云。鞦皮庫と云。鞍庫と云。皆御用の盔甲・弓矢・鞍轡・衣甲諸衣の制を造て守る。

凡天子親ら壇廟を祭り、諸に司弓司矢の官恭しく御用の弓矢をもちて先後に隨ふ。又巡狩方岳及び大閲軍旅等には帷宮帳殿幔幕綢繆るぞ武備院これを掌て張設し、其外帝親ら臨むに掌る。

皇帝大閲冑

天子軍の調錬をなすを大閲といふ。其大閲に着御し給ふ華飾の冑なり



皇帝大閲櫜鞬



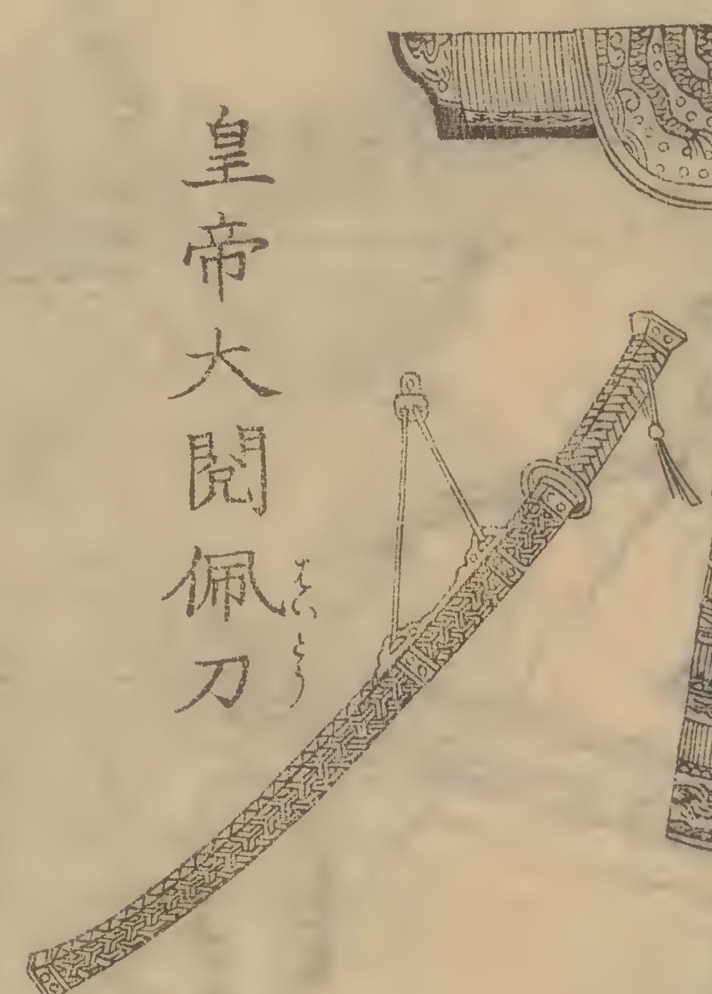
櫜鞬ハ日本乃靫なり

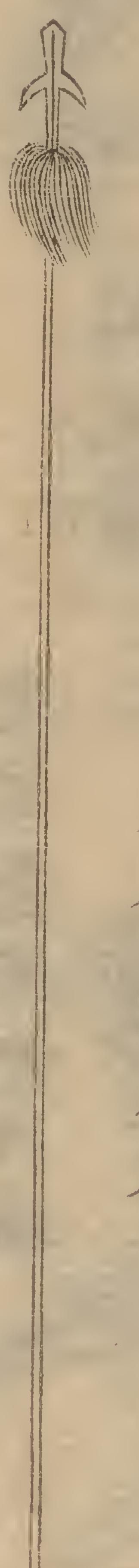
皇帝大閲甲

甲と同じく華飾りの鎧なり。天子親征に御し給ふ時ハ冑ハ寔に賠し、て三禮礼器図式に定めし冑を戴く



皇帝大閲佩刀

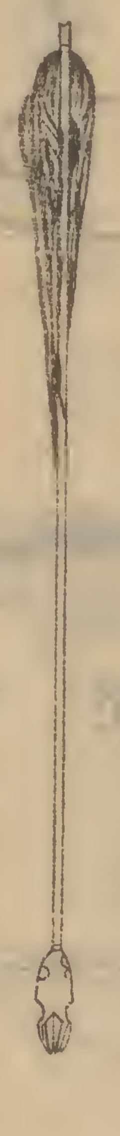




皇帝大閲弓

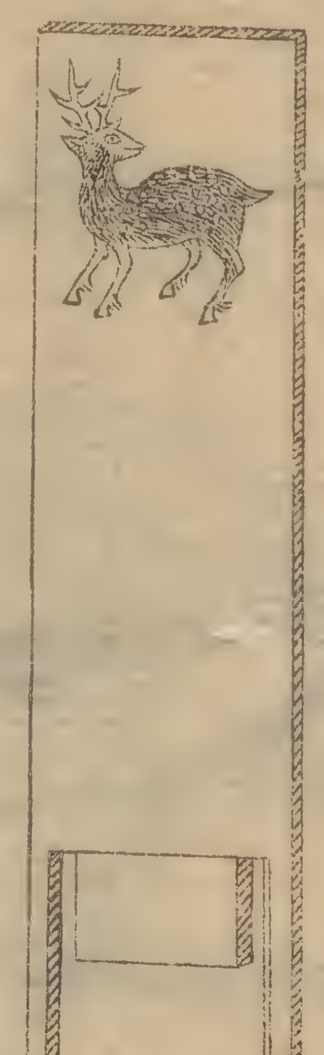


皇帝大閲鈚箭



皇帝御用布侯

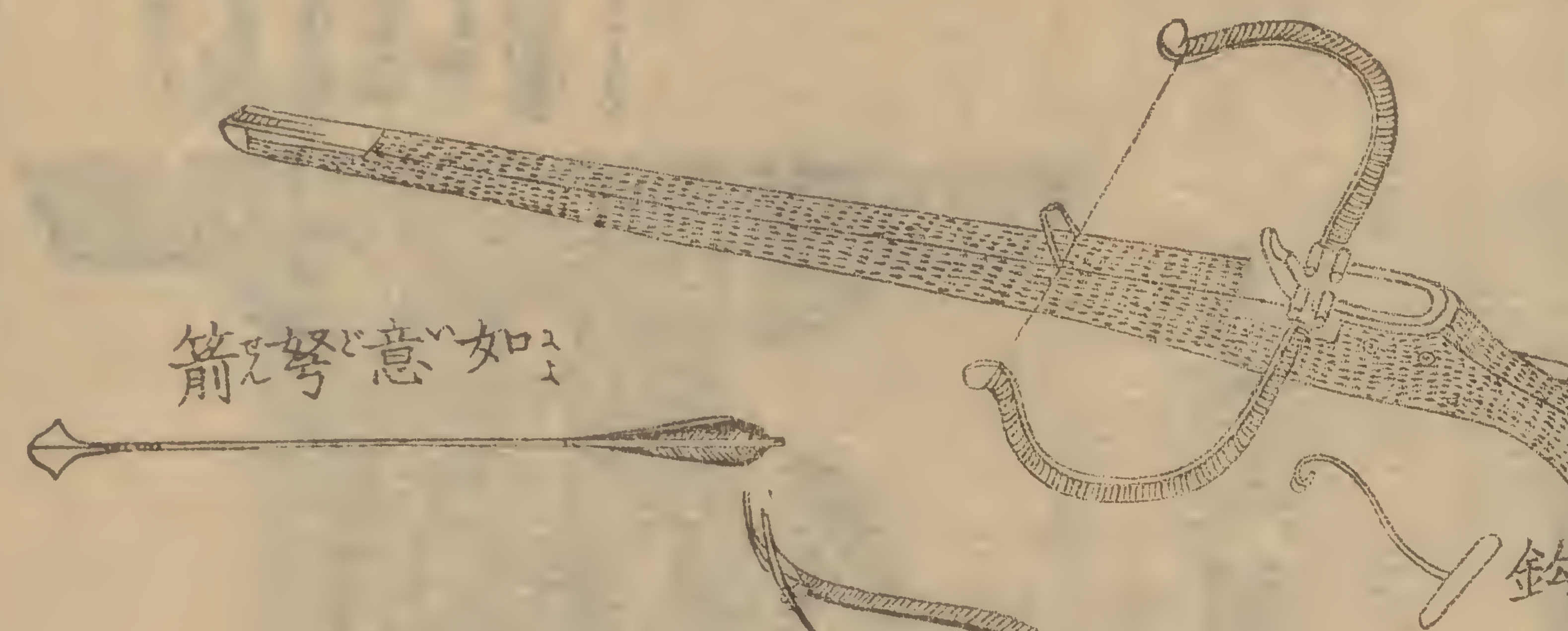
天子射猟の時乃的なり。素布をもちて麋を画く



虎槍營虎槍

虎槍營とは天子の側を護る軍隊の名也。其軍に用る槍を虎槍といふ

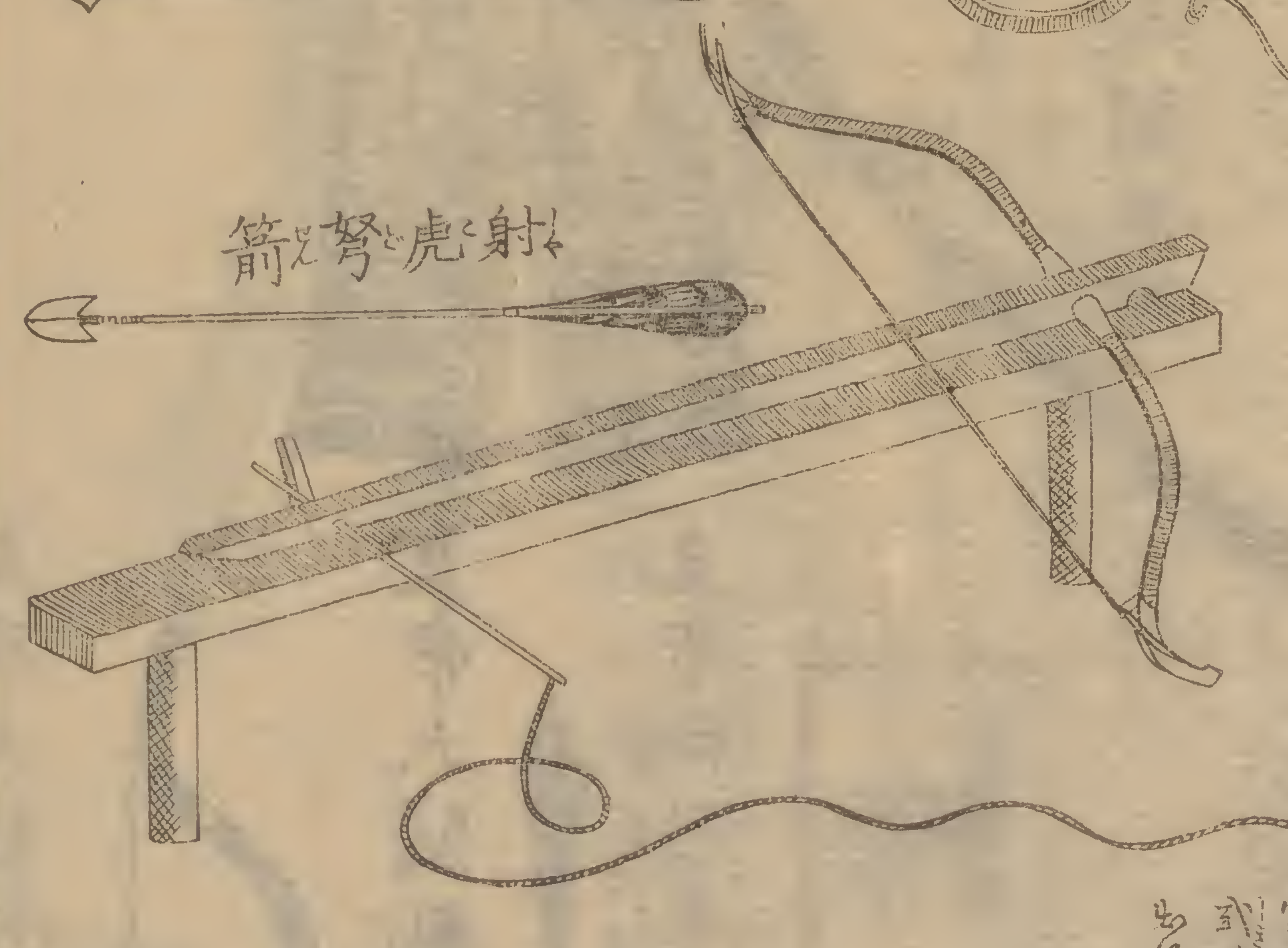
如意弩



鈎

如意弩箭

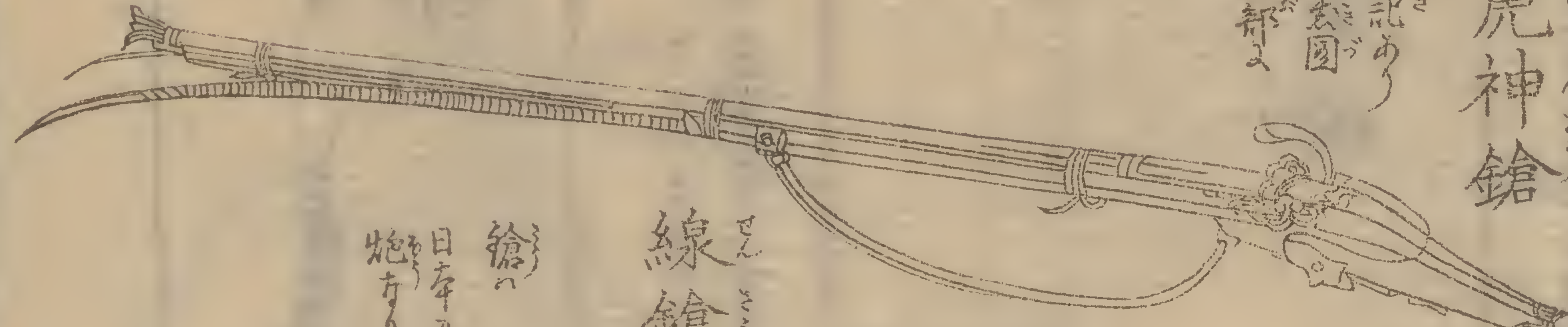
射虎弩



射虎弩箭

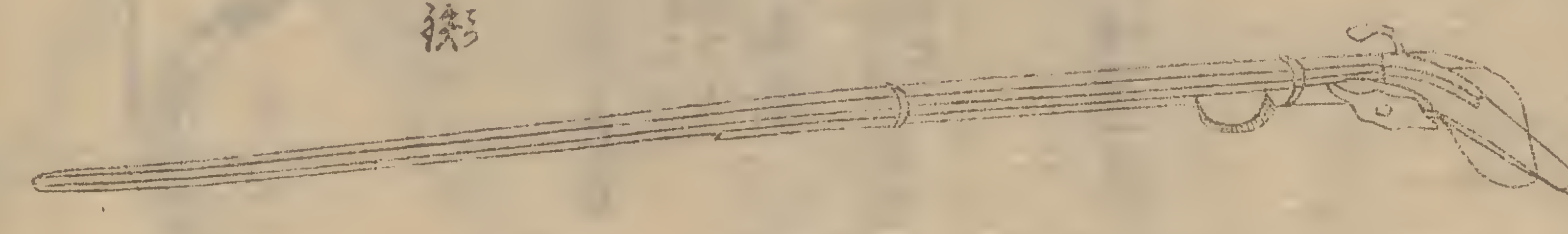
皇帝御用虎神鎗

御製の記あり審かに礼器図式武備部に出る

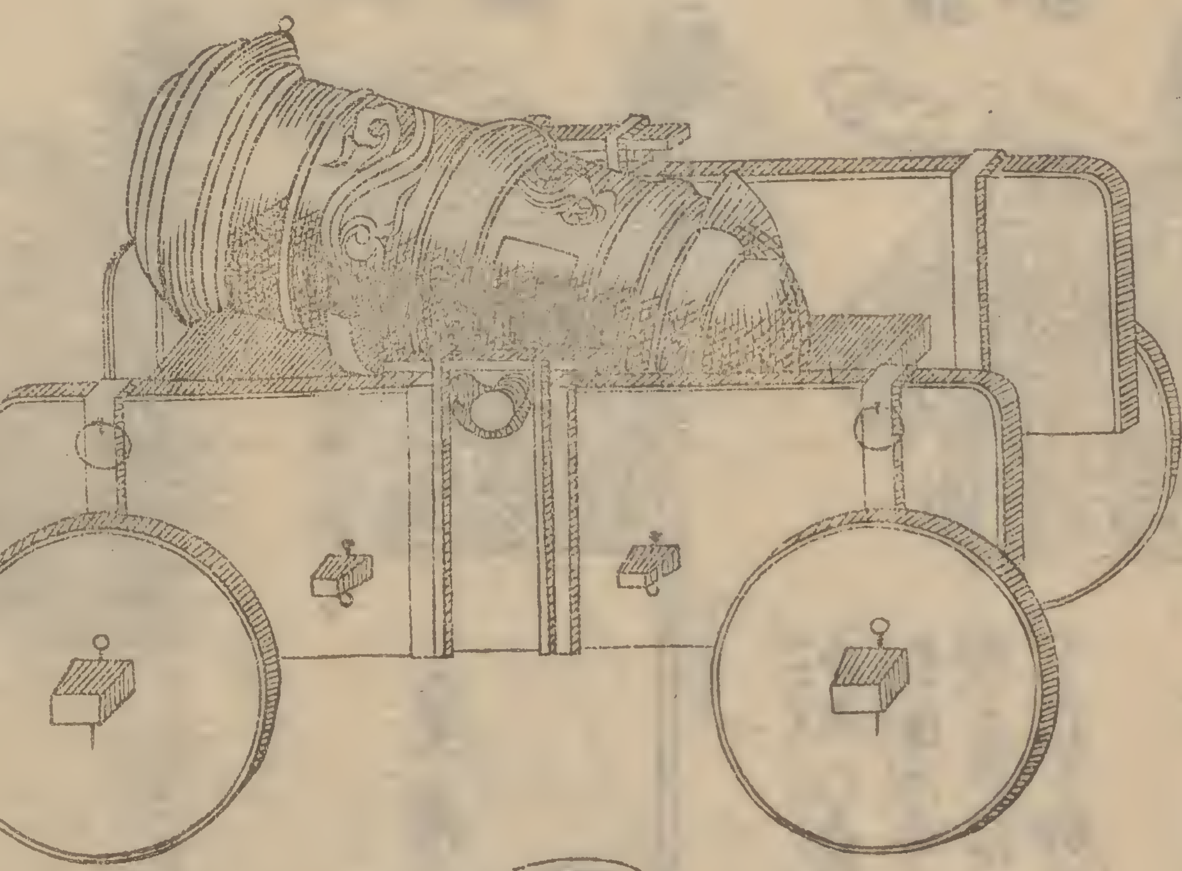


線鎗

鎗ハ日本の鉄炮なり

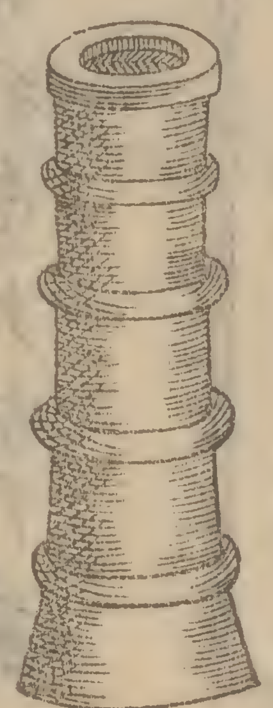


康熙御製威遠将軍礟

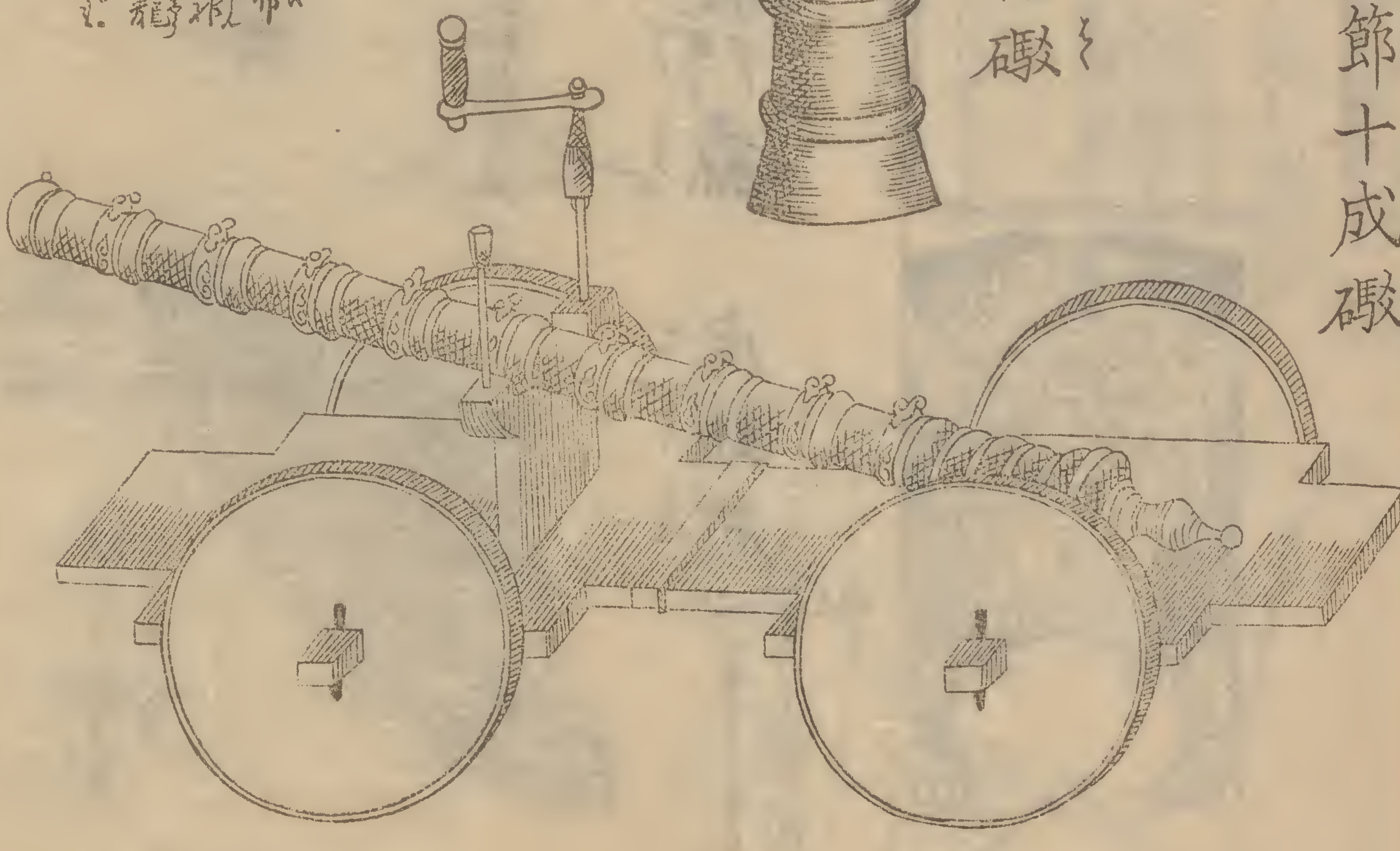


清朝礟の制数甚多し。金龍礟。制勝将軍礟。名ハ皆康熙帝の御製なり。其余。神威大将軍礟。神威無敵大将軍礟。神威将軍礟。神功将軍礟。得勝礟。衝天礟。子母礟。威遠礟。龍礟。奇礟。渾銅礟。等の数多ありて。其製悉く異なるべし。繁きをもてこれを略す。

行営信礟

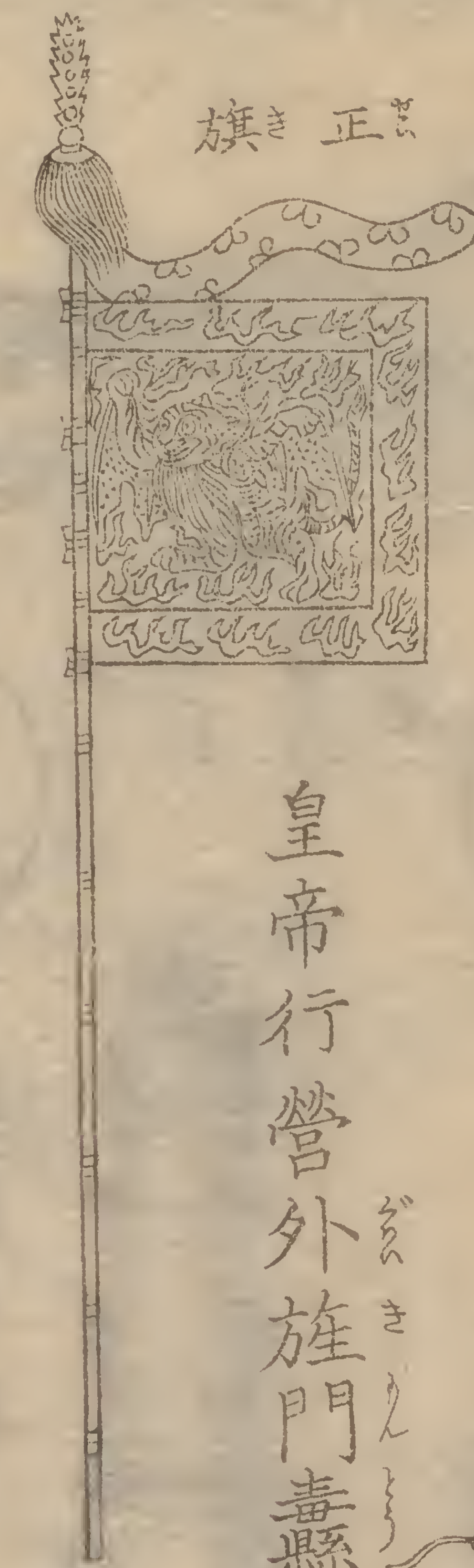


九節十成礟

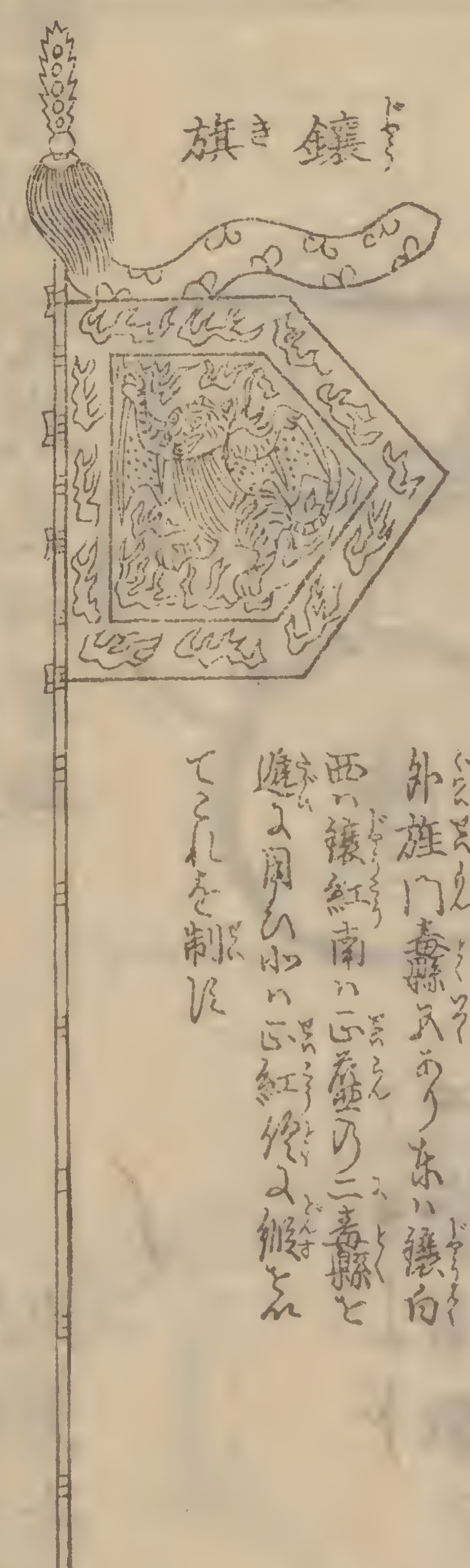




皇帝行營内城旗



正旗



鑲旗

皇帝行營外旌門纛

外旌門纛五あり東ハ鑲白
西ハ鑲紅南ハ正藍の二纛と
北ハ四ハ正紅緞をもって
これを制ス



藤牌

藤なり藤を編
てこれを制ス

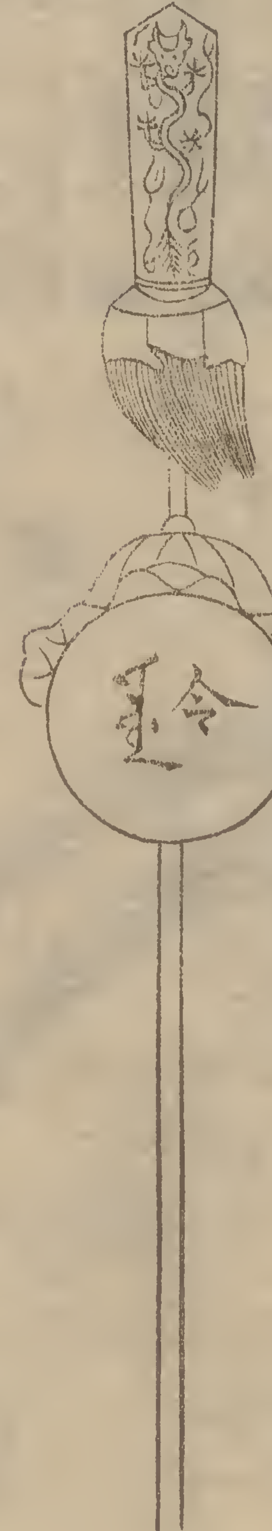


虎頭牌

牌ハ藤なり革を
以てつゝミ虎の頭を
画く



王命旗

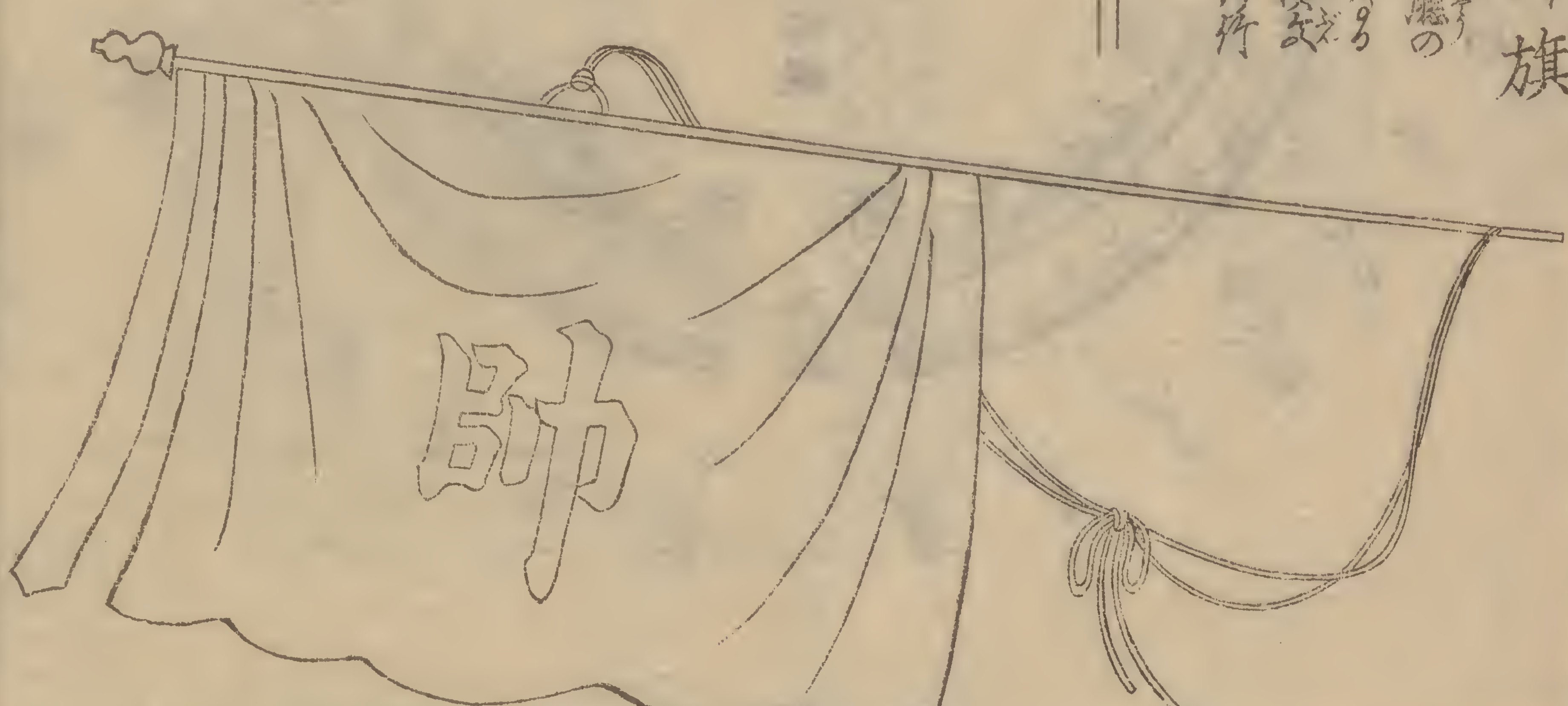


王命牌

王命旗牌ハ總督總兵巡撫提督等の官員ニ
頒ち給ひて兵丁を號令するの器なり旗ハ藍緞をもって
製り牌ハ椴木をもって為る圓形ハ朱塗なり各令字の
滿漢文を金にて塗る

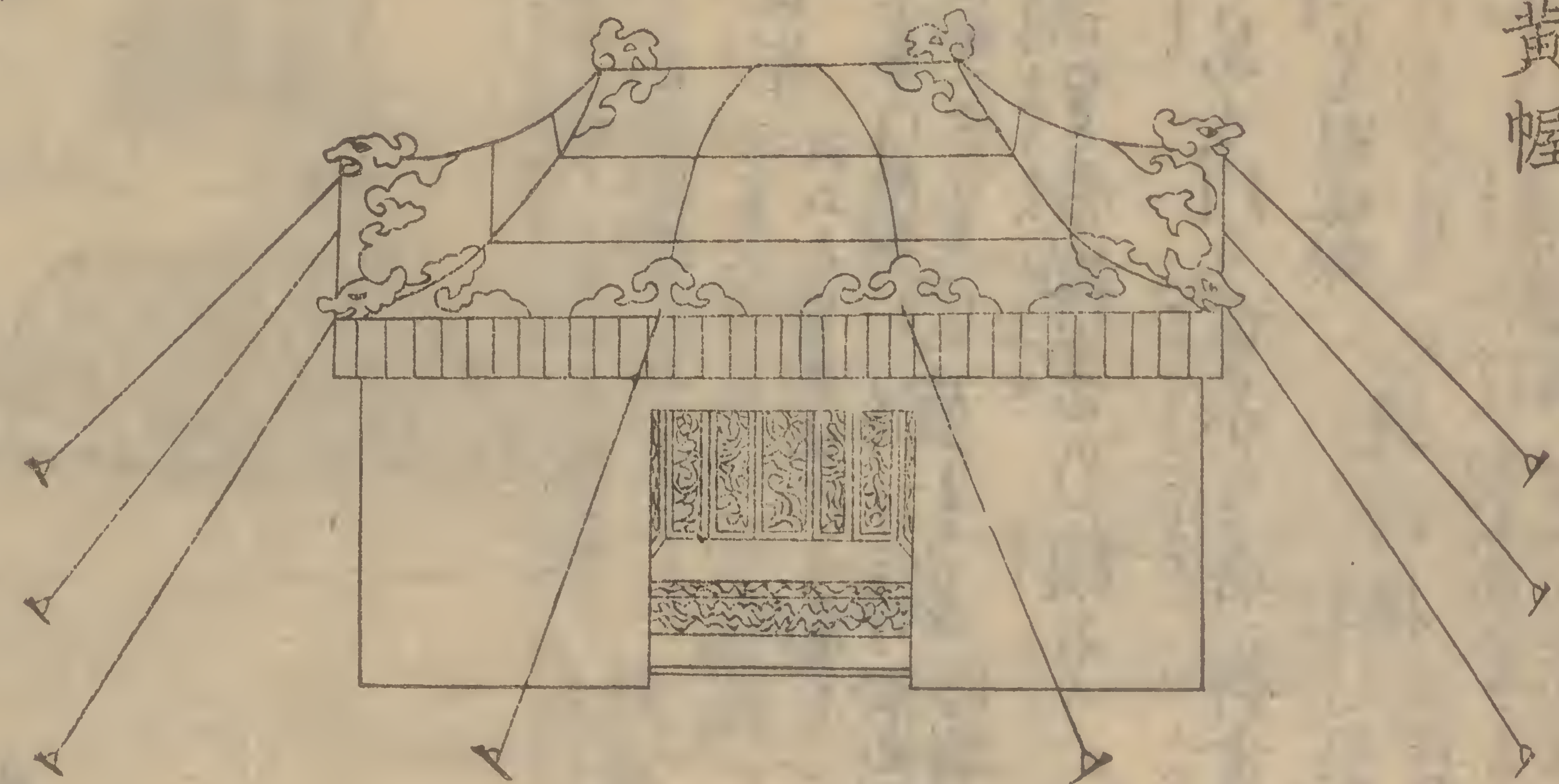
緑營大帥旗

大元帥の旗ハ演武廳の
將臺にこれを竪つ黄なる
布をもって製る帥字の漢文
を大書ス杆ハ朱ぬりの将
と同色



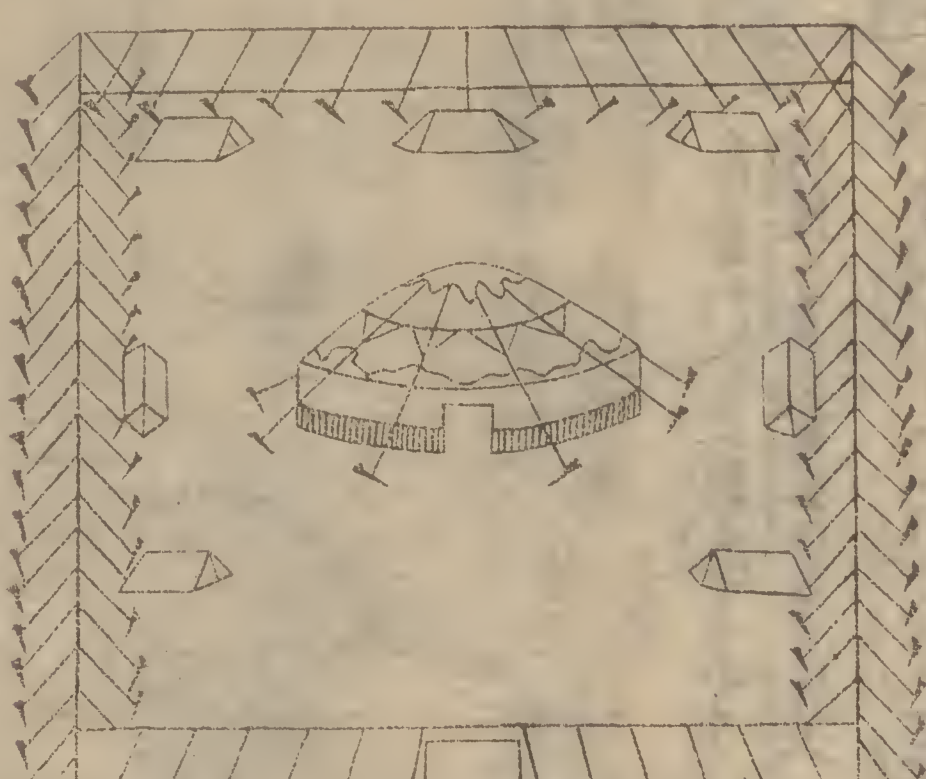
皇帝大閲黄幄

大閲には天子の御座と黄幄の中に設く又凱旋賜宴にも黄幄を設く其制黄布をもて作り縦一丈九尺八寸横二丈六尺高さ一丈二尺五寸御座の高さ一尺八寸縦五尺横七尺五寸金縁緞の簾を垂し紅氈緞縁又は貂皮の緞縁ある座具を設く



皇帝停蹕頓營

天子巡狩し給ふ時の休息所に縦横各二丈の帳城網城を設け中に御座を設く皆武備院の掌る所なり



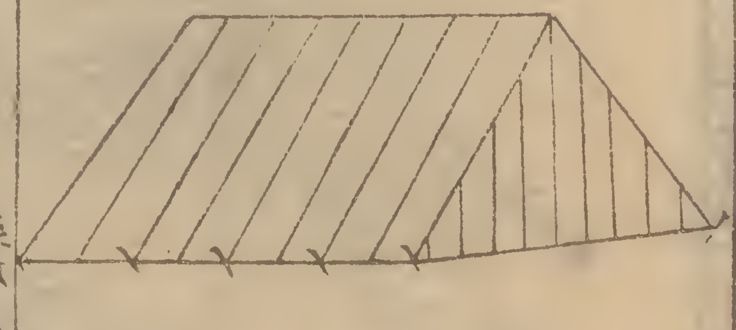
皇帝駐蹕大營

天子巡狩し給ふ途中の宿に武備院これを司りて大営を営む是に蹕を駐め給ふ八旗の禁軍網城のめぐりに帳房をつらね設けて武威を耀して以て皇居を守る其制度内方外圜く径六十丈門を啓く委しくは礼器図式武備の部に記せり



職官帳房

武職の官人大營於營のめぐりに帳房を設けて御座とし護として藍布をもてこれを制す



兵丁帳房

兵卒の宿る所なり白布をもてこれを作る



蓋官華蓋を執て御し。まさに御座の外甲庫（東華門外北／燃蓮房とあり。）外氈庫（同所／又西）外南鞍庫滯を設るうえで皆武備院の掌る所なり。同所熟皮作（同所にあり。騎河樓と相對／以上皆武備院に屬す。）○恩豊倉（東華門外北園房にあり。／内監人等の食ふの米を納る。）○儀鑾にあり斯文館（東華門外北／池街の西にあり。）○宣仁廟（北池街に瞻／闡殿とあり。）雍正六年勅して風神を此にまつる。門に世宗皇帝御書の額あり。○凝和廟（北池街騎河／樓の南にあり。）雍正八年勅して雲神を祭る。門に世宗皇帝御書の額あり。○關帝廟（騎河樓街磨児胡／同にあり。舊瞻園殿）廟と名く。殿二あり。皆暖閣殿。関帝廟の字を持る。○騎河橋（東安橋の北にあり。燕史に玉亭ありて橋上に居て涵物をうるこれ／即此橋なり。今尚橋に石段二あり。橋の西街の北に即関帝廟也。）○北舊亭○眞武殿（御馬圈の南にあり。地と很聞と名く。明の／御馬監裏草欄が舊地なり。天啓三年の碑あり。）○御馬圈（很聞にあり）○



○馬神廟 馬神廟街にあり。明の御馬監が馬神の舊祠なり。康熙帝の御書あり。廟内大鐘一口あり。上に明の正德十年鑄の字あり。又小鐘一口ありて字なし。

○一等忠勇公第 馬神廟街の東にあり

○明の代、御馬監の東に北花房あり。北花房の小河に小龍あり。長一尺許、色黄。乾隆の朝、康熙の間に誘る。みつく流あり。鱗はしやがく、獲て承いの乾に包て、金盆に盛て奉る。時に天啓皇帝命して玉龍潭に送放さしむ。

○萬祝寺 王服寺の東にあり 乾隆帝御書の額あり。

○法淵寺 萬祝寺の東にあり。寺内に銅鼎一あり。高さ六尺あまり、乾隆帝の碑文あり。○智珠寺 萬祝寺の西にあり。乾隆帝の御書の額あり。

○萬祝寺の東廊の下に銅鐘一あり。番經廠の字を鑄る。西廊の下には銅雲板一あり。漢經廠の字を鑄る。法淵寺は明の張居正が撰する番經廠の碑あり。これに據て考ふるに、萬祝寺、法淵寺、智珠寺の三寺は明の代の番漢經廠なり。額は章嘉の字なり。○湖圖克圖は蒙古の修道の師なり。湖圖克圖は道行高の稱なり。

○吉安所 南にあり 鐘鼓寺の元宮春庭苑を備て、明の代の司禮監の所なり。後に松樹あるを以て内書堂と号し、小内宦を書を讀の所とし、是内書堂なり。

萬祝寺銅鐘圖



れ学士已人日々に清て学生を教授し、此に來て教を受る書生凡十餘人を粉して甚多きを許されし。学士陳山より始まり、今に至て尚存れり。学生一名ごとに白機・布帕・龍擲香とんで束脩とす。

○鐘鼓寺 鐘鼓寺胡同にあり。○明代の鐘鼓司廨なり。出朝鐘鼓及び内樂・傳奇・過錦・打稻諸の雜戲を掌る所なり。

○五聖祠 酒醋局の南、蠟庫胡同にあり。碧一あり。こに内府供用庫又聖祠供奉の十字を鑄つけり。

○興隆寺 酒醋局胡同にあり。鐘一口あり。上に酒麪局佛堂供奉の字を鑄る。

○華嚴寺 内織染局胡同にあり。明の弘治、嘉靖両度重修の碑記あり。

○朱彝尊賜宅 景山の北、黄瓦門の東南にあり。○朱彝尊字は錫鬯、浙江秀水の人なり。竹坨と号し、康熙己未の歳めされて翰林院檢討となる。人なりてこれを經史子集及び金石碑版まりして、術未然奥に至る。悉く考索せざるといふことなし。其著書を曝書亭集・經義考・日下舊聞・詩綜・詞綜など名の人の能く及で博雅の稱を得たり。

○藍靛廠 地安門南の西にあり。この東に向ふ○北に廟あり。関帝の像を安ず。このもの南に向ふもの、天王廟と云ふ。○景山の官学 景山の東門の西にある連房なり。

朱竹垞賜宅

講直華光殿
居移覆道坊
經營倚將作
宛轉繞宮墻
對酒非無月
攤書亦有牀
承恩還自哂
報國祇文章

朱彝尊作

公廉書



五經紛綸抽腹笥布
韈麻鞵見天子歸來
著書以沒齒千秋之
名在青史

錢唐龔翔麟拜題

界浦 里榮書



竹垞先生之像

景山 神武門の北にあり 大内の鎮山一に萬歳山といふ。周垣二里あまり百餘丈。五の峯ありて上に各亭ありて佛像を供し山の翼みな垣をめぐらし圍墻と樓を山の後に小門二あり。東は山左裏門といふ西を山右裏門といふ。

壽皇殿 左右裏門の中南にむかふ。壽皇門あり其内に廣九間。康熙皇帝の神位を供ス。乾隆帝御製の碑文あり○殿の東北に集祥閣あり西北に興慶閣あり。殿の東を永思門とし内に永思殿あり又東を觀德殿といふ。明の旧制に係まり。

護國忠義廟 觀德殿の東北にあり關帝並馬の像を塑して此世祖林泉咨醫圖に多く奇景を插。

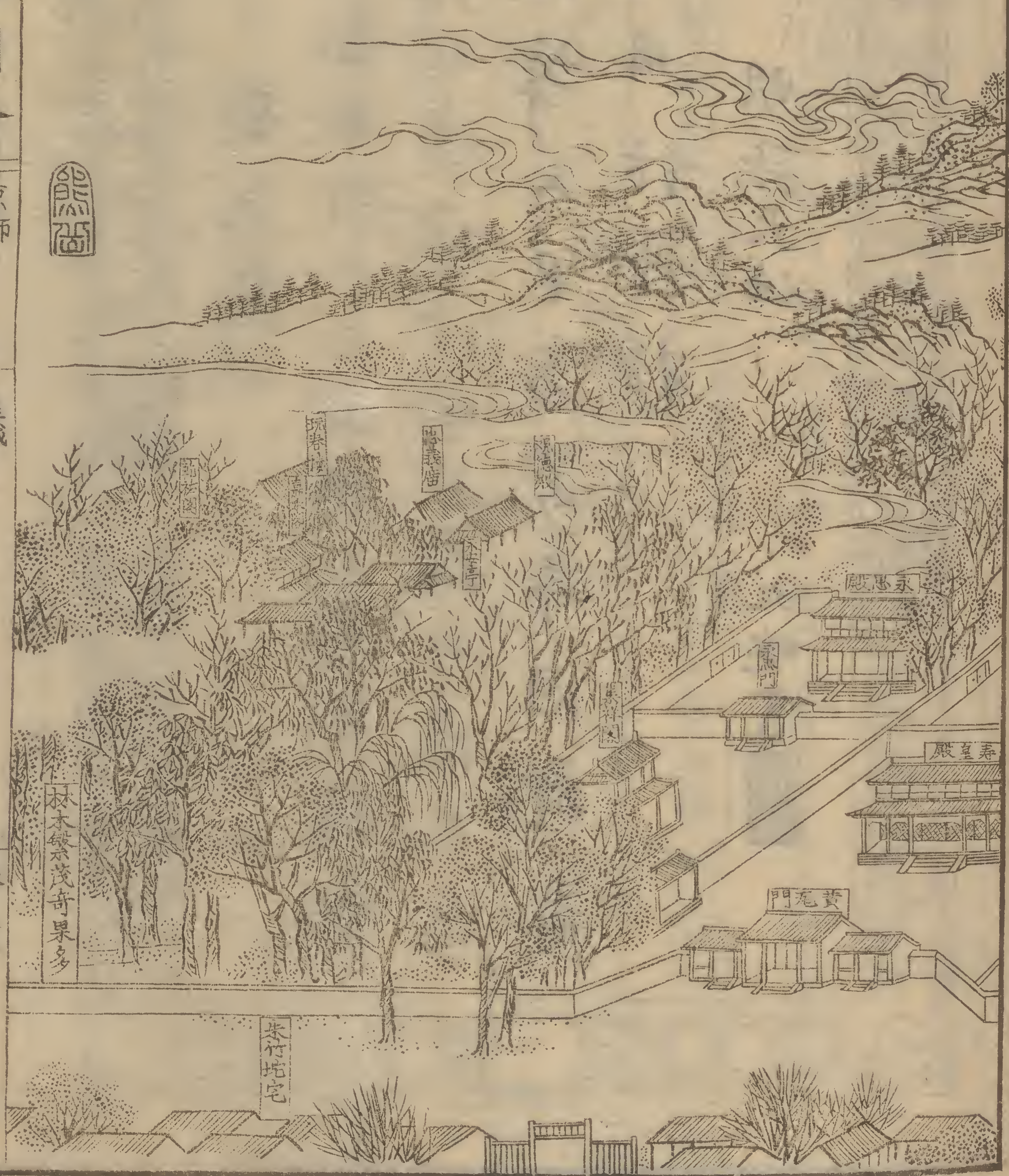
北上門 景山の正門、神武門と相對す。

景山（けいざん）

雪裏瑶華島雲端白
玉京削成千仞勢高
出九重城繡陌回環
繞紅樓宛轉迎近天
多雨露草木毎先榮

成徳詩





題萬歳山

玉岳来朝日　三山路不迷　長楊秦苑壮　盧橘漢園西　珠斗凌空近　瑶峰入望高　萬年回聖寿　何用訪丹梯

明欧大任

九畹書

○厚載門の南、紫禁城に通て、煤山あり。これを本、萬歳山といふ。其高数十仞、衆木森列し鬱乎たり。傳云、其下皆石炭を聚て、閉城不虞の用に備へるなりといふ。

○萬歳山の东に寛廣地あり。射箭の所とし、観徳殿永寿殿といふ。観徳殿の东南に近き所に亭あり。内に牡丹芍薬多し。旁に太石壁あり。其色甚古奇なり。

○臻福堂　明代萬歳山乃东北にあり。の西に一樹あり。其樹幹に鐵雲板一を掛たり。僅に其二三分を露し、蓋古物なり。

○稽察内務府衙門　景山西門の路北にあり。都察院満御史二人其事を稽察す。○白石橋　山中門の、觀音胡同にあり。明の嘉靖二十年、萬法宝殿を此地に建。中を寿憩と云など、右後を禄舎といふ。

○護城河　紫禁城を繞る川なり。北閘口より分流して、内官監白石橋、太高玄殿の东北上西門の外を經て、紫禁城に至り、东に流れ、五龍亭の西を經、其西より流るゝを社稷壇の西より巡り、東に至り、湧福の河と合流して内城を出づ。

○太高玄殿　神武門の西北にあり。乾隆帝御書の扁額あり。明の嘉靖中に建。清の雍正乾隆間両次重修を、○門前に直亭二あり。弘蕤園搆人巧を極め盡せり。明の時中宮名九梁十八柱と呼ならはせり。

○昭陽齋の第一宮より第一帝、崇祀、黄金を範して像を造る。高一丈許、則明の世宗皇帝の玄修の處也。

○太高玄殿に三清の像あり。今なほ多く崇奉る。蔵凡内官宮婢、道教を習ふ者は皆此に来り、拝儀を演ず。

○慎刑司署　西華門外南長街路西にあり。内府の刑罰を掌る。○凡内府に属する者罪を犯せば、其刑部の律例に例て決結し、杖一百以下の者は慎刑司に、杖一百以上の者は刑部に送りて其罪の擬定を紀し、明らめ或は死し或は流徙の刑に至せしむ。職官なる者罪を犯せば、王を請て枝禁し、其罪ある者は別室に置て此を禁ぜしむ。其病者は醫薬を以てたすくる者の為なり。

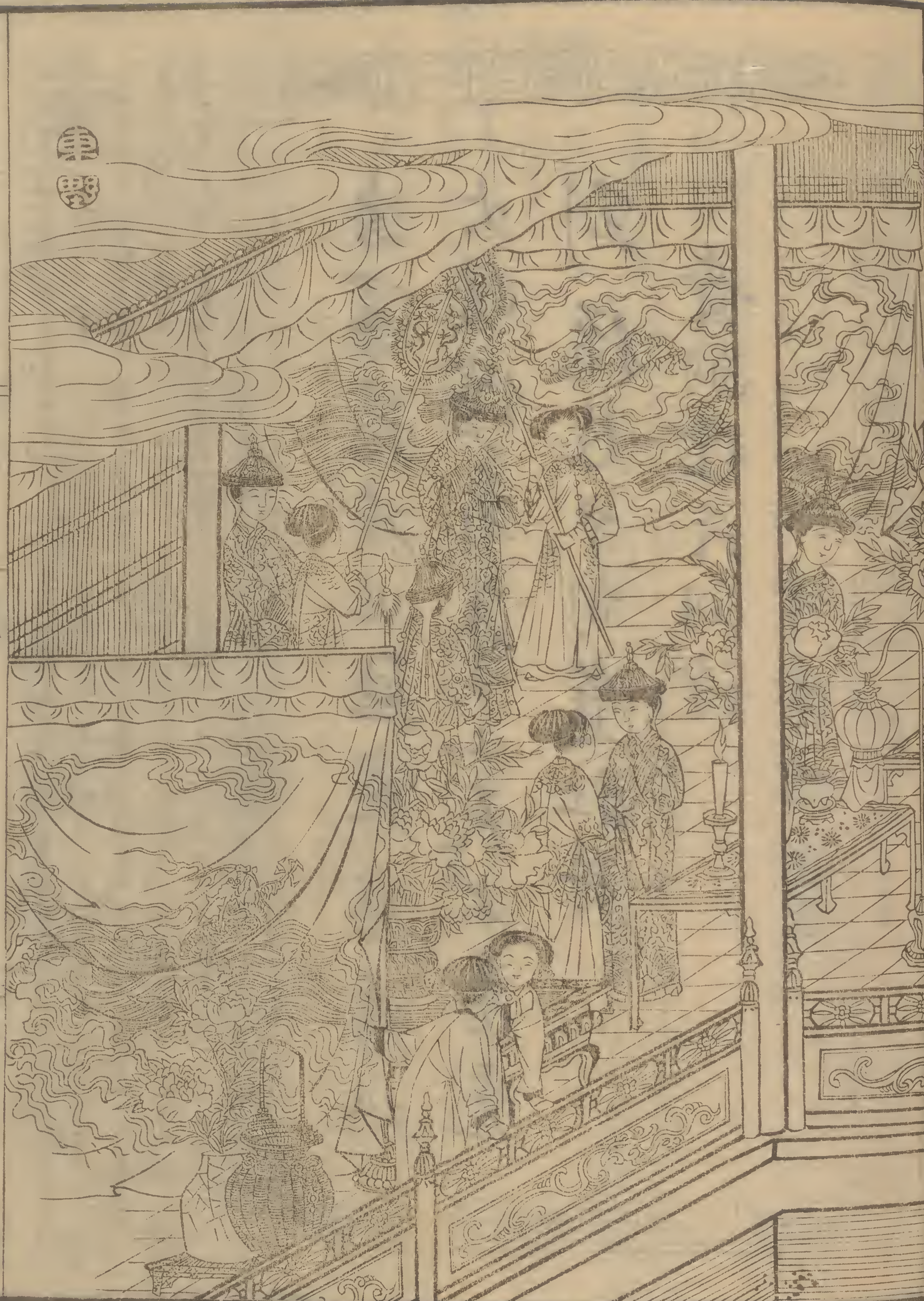
○慶豊司署　西華門にあり。牛羊の廄を掌る。○凡内三圏と、西華門の外に設く。外三圏と南苑に設け、乳牛牧牛犢牛、乳牛等を養ふ。其畫に三への圏を設け、牧羊を八百疋十。

朱搶春の羊二十を畜ふ。又張家口外に牛羊群を設く。牛三万、羊二十万を畜ふ。其外左翼黒岡崖に羊群百有十を設け。群毎に羊又百を以て率とし。又養什木には牛群五を設け。群毎に犏牛又牡牛又乳牛九十を畜ひ各牧丁あり。所の牛羊悉く烙印を押て是とす。○壇廟の祭には慶豊司より犢牛を供し。吉凶に奉献神には合子を奉じ。奉先殿及び皇城内の神祠の祀りには犠羊を供し。皇子公主の婚嫁には犠羊を奉る事皆慶豊司これをつかさどる。○會計司署 西華門外北長街路東にあり。内府の官庄地畝。荘糧。徴收の事を掌る。○凡京畿盛京豊関外にある所の皇室宗族の領せる荘田荘園の貢税を納る職署なり。兼て官女の選と掌る。○營造司署 内府にあり。氷窖の事并に薪炭を掌る。○凡車駕出御の時は遇に街道を清掃し。秋冬は禁城牆垣の甚穢を芟除き。冬の季は積雪の掃除を宮殿牆垣を修造し。公廨館廨器物等を造作し。又春の季には禁中内溝渠を疏濬し。夏月には涼棚を搭く。○武英殿修書處 内府にあり。武英殿に於られる聚珍板を雕て擬して出る。○管轄番役署 内府にあり。凡罪を犯る宮人監び巡更せる太監等を捕緝し。○今の緝番役は。唐に不良人と稱し不良師あり。之を掌る。即漢の大誰何なり。○萬壽興隆寺 西華門北長街路西にあり。明の兵仗局也。康熙三十九年勅して建。康熙帝宸翰の額あり。佛堂の前に明の崇漢雲重修の碑あり。○静默寺 内府にあり。明代関帝廟の舊趾。康熙五十二年重建。康熙帝の御書額あり。○福祐寺 西華門外北長街路東にあり。雍正元年に建。康熙帝大感功徳佛といふ牌を奉安し。佛殿の内東には案を設け乾隆帝御製の文集を陳ね。西は宝坐を設。雍正帝御書の額あり。○昭顯廟 内府にあり。雍正十年勅して建。雷神をまつる。雍正帝御書額あり。風神雲神の廟は東華門外にあり。雷神廟と倶に春秋の仲月官つかはしまつりを致さる。○宣

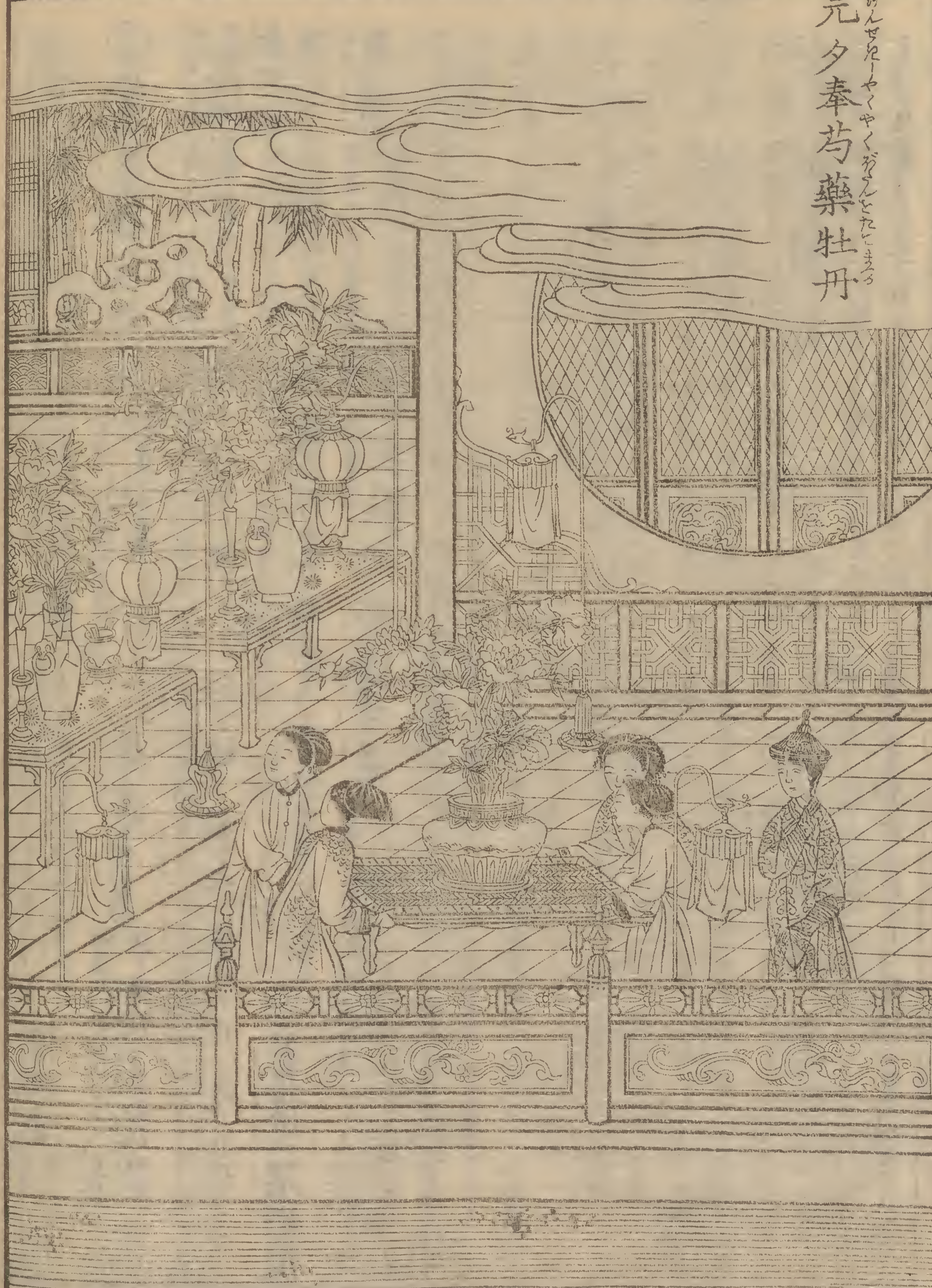
三倉 西華門外北圍房にあり。凡内廷歳時の祭祀及び奉先殿のまつりに奉進せる粢盛稲粱の屬ひ其外果蔬蜜蠟等を分ち貯へ。會計司之を掌る。○像伏倉 西華門外北城中連房にあり。

○堂内管領關防署 西華門外路南にあり。八旗管領の屬する所なり。○都虞司署 西華門外禧和門にあり。武職を陞補し。俸餉を給ひ。敵を俘獲せる事を掌る。○凡内府圓明園及び盛京の包衣三旗及び上内官衙の護軍等の外。選授補陞俸給の事を掌り。兼ては獵牲の喇官ありて虞人數多人を司り。網戸よりは禽を献じ。鷹手は雉等を納め。瓶戸は瓶などを奉る。蜜戸は蜜を獻じ。王多羅樹の獵戸よりは雞の腊を貢し。水獺戸よりは獺の皮。海戸よりは細鱗を捧け。其外京畿各州山海の獵物をすべて都虞司之を掌る。○管理三旗納銀莊署 西華門外南長街胡同路東にあり。畿輔の各莊歳納糧銀の屬を掌る。○掌儀司署 西華門外南長街織女橋にあり。内府の典禮を掌る。○凡太廟社稷奉先殿堂子の祭及び萬壽聖節。朔望元旦の慶賀。冊立。冊封。御經筵。親耕。親蠶。沿陵巡狩等の諸典。或は燕饗食。或は酒茶を賜ひ。皇子公主下嫁。其外雲神風神雷神。泥溝の瀆の龍神。五岳山川の神等に官を差て祭りをなさるの儀注兼て果園の徴收と又官学。藥房等の事。諸掌儀司之を掌。○眞武廟 織女橋の南にあり。明の寶鈔司の故址なり。寶鈔司の署は緑河の後ふあり。川によりて泡稿葉池あり。此西石殿を構へて池中石殿の後遷ふ川ぐるく積て恰も白象の形に似たり。固て名けて象山といへる。泡房七十二將間毎に龕室一を設け。各て七十二凶神を合祀す。殿には尚七十二洞洞の名を銘ず。

南花園 西苑門遍の南にあり。明の時の所謂南花園なり。此所に坑洞多くありて洞中北風を恐ぎ此坑洞を暖室とす。明の時より允蔬のたぐひを坑洞の内に植して園に備へ。京師はもとより北地にて寒気烈しく。暖室によらざれば菜蔬とうへ物を得ることあたはず。正春の日に鮮き葡萄を奉る。これを名けて暖窨と云。○清朝に於て南花園とし。彼坑洞の内にまた多くの花樹を雜植ひうへ。珍花を暖室に開かしてこれを奉る。殊に蘇州。杭州の名産として。盆樹盆景のたぐひあまた献上あり。これらは都て遠く北地の風寒はなはだ苦みに花木皆枯凋く。これより一層灌ぎ。かの暖室に納む。



元夕奉芍藥牡丹



再び生活れ又臘月より昔茉牡丹を焼洞の内に植並べ玉の年を送帰るそのゆへ炭火内にたてまつり銀燭のともしまつ孫堂といひの乾いたるよく開き出するぞ時ならで月光ぬ隠しそれのこうべ玉しは多く秋の比より蟋蟀を多く暖室の内に畜ひ正月上元の夜に至りて玉泉の西山に御幸ありて花燈を観給ふ附鰲山の花燈の中よりきりぎりすと細楽を奏するをのり聴に止めが虫類の声すくなからず嬉しく秋との界をも希へば佛の所謂極楽世界道家にいへる仙境もこれにはおよじとぞ称せる。

出窖花枝尽怯寒
密房烘火暖催看
年々天上春先到
臘月中旬進牡丹

査嗣瑮唐洞詩

可亭書

○玉鉢菴　西華門外西南にあり。明の御用監の旧址。後改て真武廟とし清朝まで玉鉢菴と改む。元の世祖至元二年十二月、瀆山大玉海成る。勅して廣寒殿の中に置しを玉甕といふ。後西華門外真武廟の中にあり。俗玉鉢と称し、故に今菴の名とせり。乾隆十年、勅してこの玉甕を今の承光殿に納む。承光殿の事は後に見ゆ。

○奉宸苑署　西華門外、西苑門の南にあり。苑囿河道稲田の属ひすべて總理す。○玉泉山其外苑囿の、公田玉殻を隣し、凡苑囿にかゝる諸の亭臺池沼、林麓、松鴻等皆修理し、及び京城門外の河道、橋梁を總理す。

西苑　西華門の西にあり。四方の門に西苑の榜あり。苑中に太液池あり。池中に瓊華島あり。殿座の宮室風流の秘亭、すべて苑中の景悉く譲るべし。僅に二三を挙て次に記す。

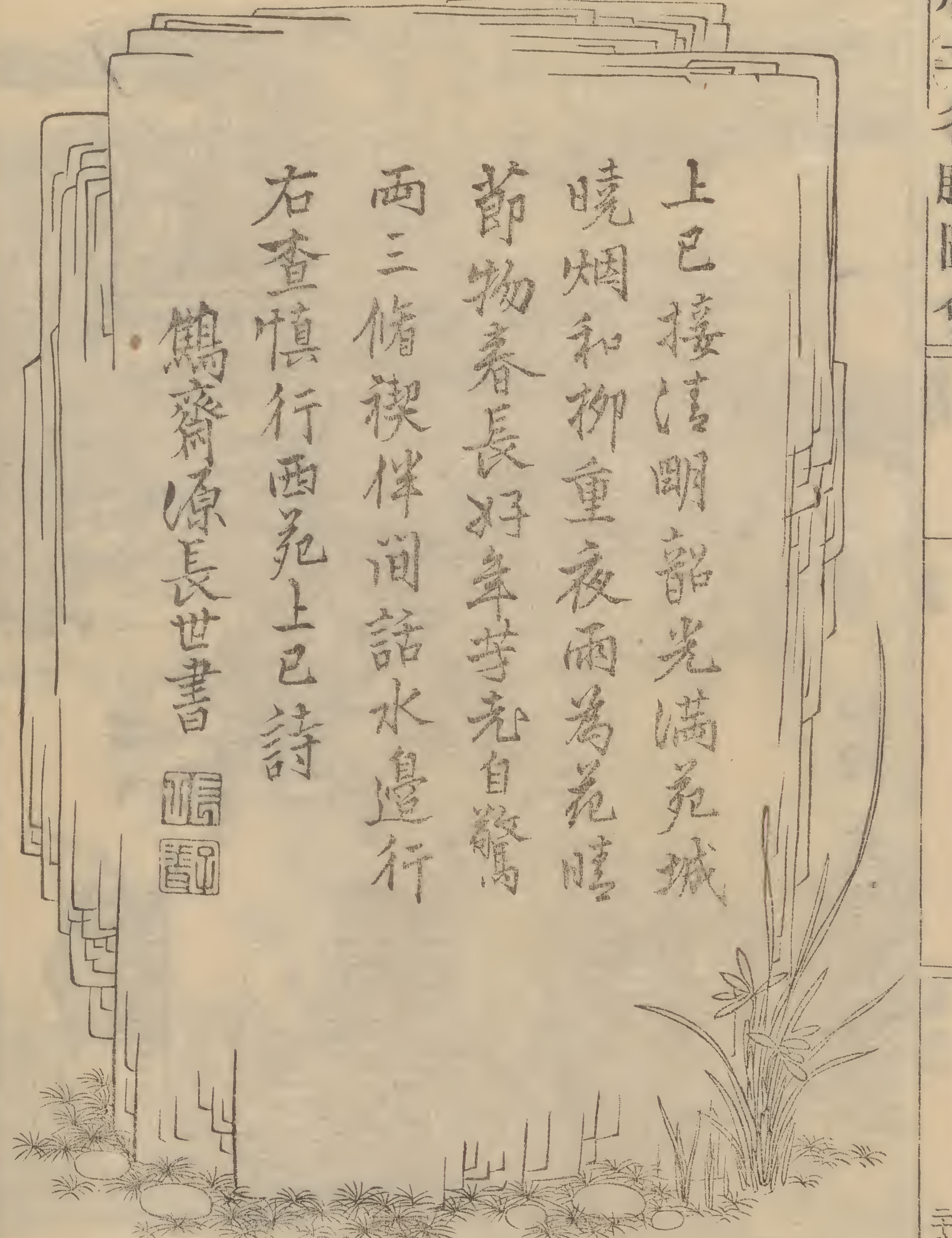
太液池　即西苑の内にあり。池の亘り四里、東西の濶さ二百餘歩ばかりなり。これを西海子と名く。石梁一を跨ぐ。廣二丈餘、長数歩、両崖は白石を積み、闌干を擁し、其中に木を駕し、鐡鎖をもてこれを掣き、巨舡をして往く其下を通らしむ。東西に華表あり。東なるは玉蝀といふ。西なるは金鰲といふ。又一の小梁を架す。承光殿より瓊華島に達る。南なるは華表あり。南なるは積翠といふ。北なるは堆雲といふ。其南を瀛臺といふ。北を五龍亭といふ。蕉園紫光閣は東西に相對し、岸を夾て楡柳古槐多く蔭り。皆数百年のものなり。禁中の人、瀛臺を称て南海といふ。蕉園を中海といふ。五龍亭を北海といふ。夏の晩ちすは汀の蓮花初旬の目に花たち、ひ暑をしのぎ、やめる妃嬪、御荷香を愛す。此に係と物ごとの厳き日に八旗の武官集りて操練をつし旌旗を列ね、氷の上に馬を走らせ、射を試む。これを名て凍猟といふ。

○おしなべて太液池の總称なり。其宮殿樓榭の光景ひ分てこに記し、且圖畫を備せ觀て好古の観に備ふ。

勤政殿　太液池の東岸を循る。瀛元殿勅政殿の後に徳昌門あり。門内正中南むきの殿なり。殿の東を藻韻樓といふ。西を綺思樓といふ。

南に折池の縁て北の向へ。香扆殿　瀛元殿の北に對す。


冰嬉



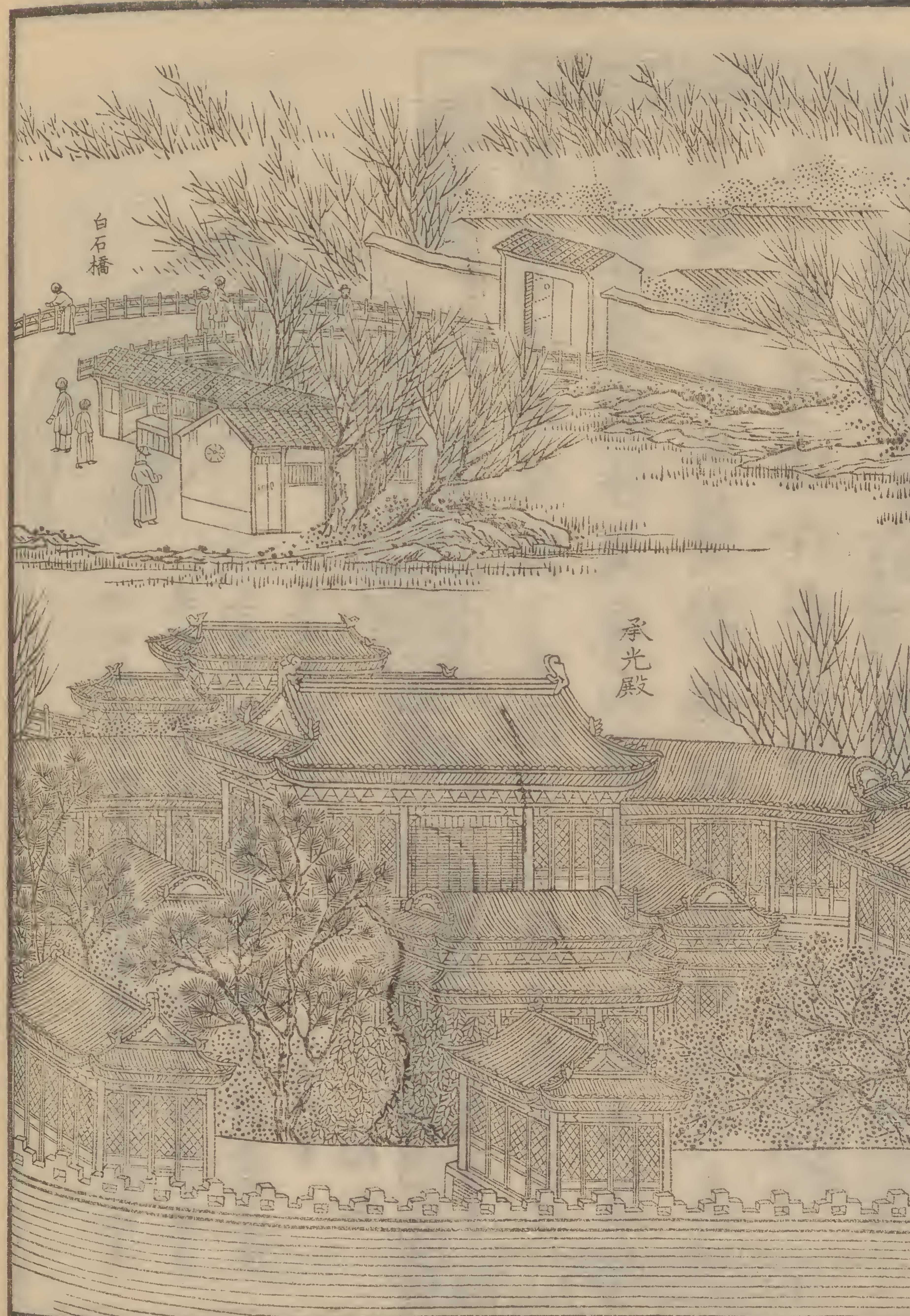
上巳接清明韶光滿苑城
曉烟和柳重夜雨為花晴
節物春長好年芳老自驚
兩三脩禊伴閒話水邊行
右查慎行西苑上巳詩
鵝齋源長世書



新蒲古柏曉陰ゝ太液晶明接上林翡翠
層樓浮樹杪芙蓉小艇出波心人歌魚藻
衣冠會水奏簫韶鼓吹音欲望天顏真
咫尺露臺迴合彩雲深
施閏章西苑曉行之詩
河三亥書

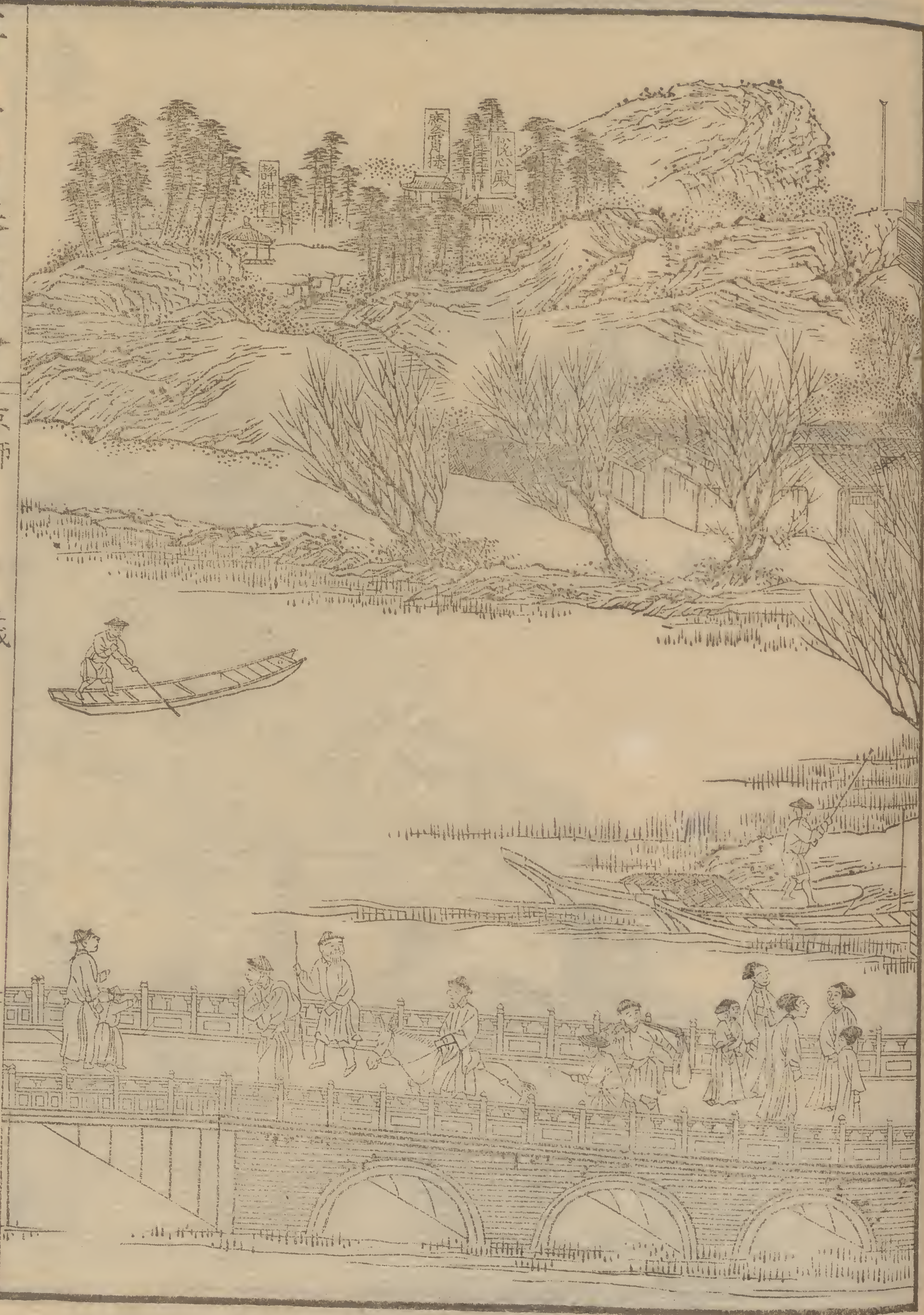
徐乾學西苑詩丹禁晴開晝漏遲上林春水綠逶
迤金隄柳弱龍媒下玉殿花深雉尾移淑氣暗通
三島月和風先拂萬年枝　宸遊扈蹕宜春苑多
是天街燈火時
荒鳴門書

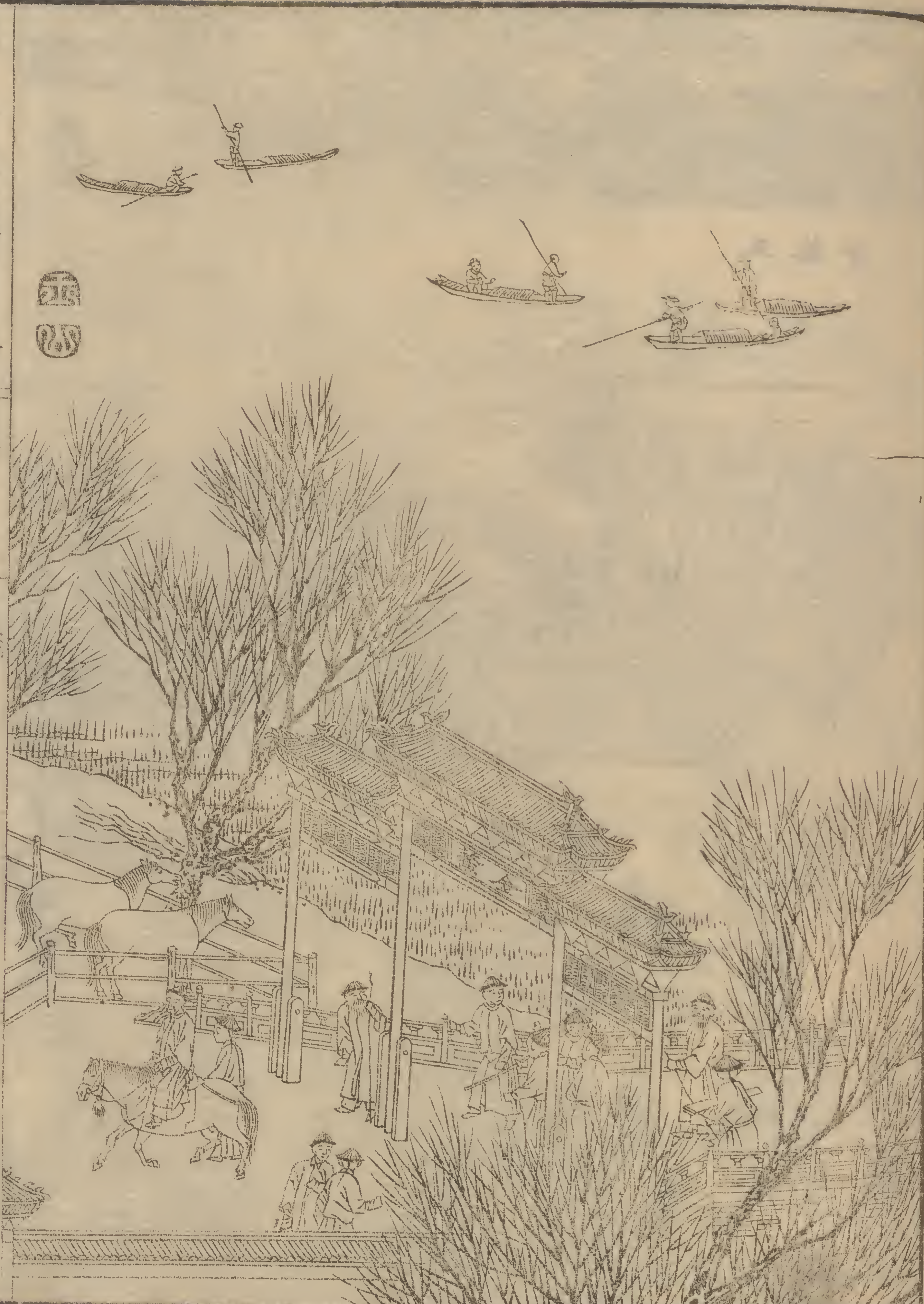

太液池


白石橋
承光殿

其一

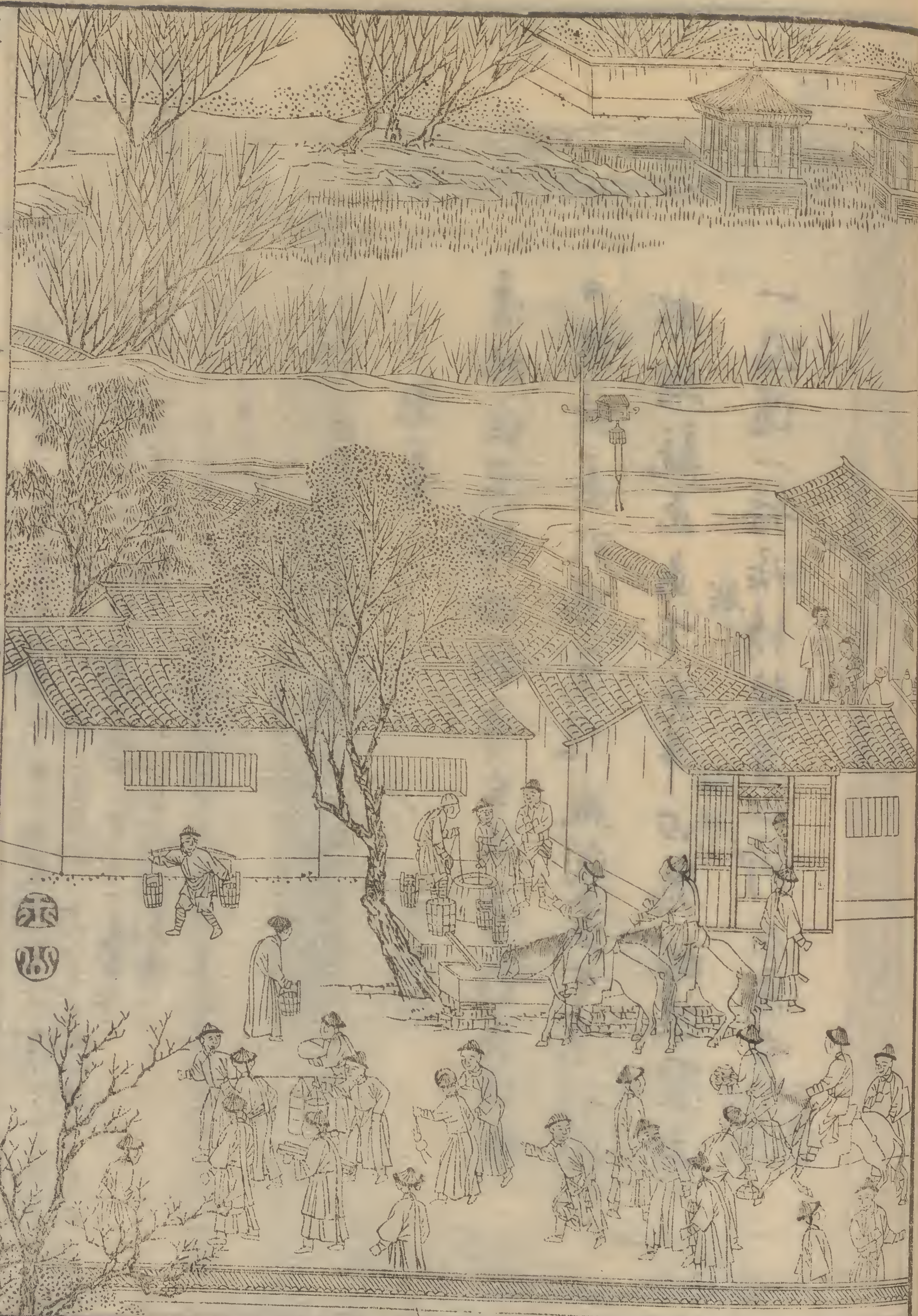






其二





其三



瀛臺 香扆殿の後にあり。南に向ふ。東に春明樓あり。西に湛虚樓あり。北にのぞむものを迎薫亭といふ。○明代瀛臺を南臺といふ。又趯臺陂と稱す。林木深く蔚まかなり。昭和殿あり。其前を澄淵亭といふ。南に村舍水田あり。稼を觀る所なり。清の順治の間此に宮室を建て、夏月暑を避るの所とし、康熙の間修理を加へ、増美を爲して上を華藻飾、弥美を備ふ。

徐乾學記云、勤政殿之左歴小徑入門、爲知稼軒、數武至秋雲亭、其西則嘉頴軒、南則狎鷗亭、平臨太液、迤西朱墻內、爲豊樂園。

南臺　文徵明

青林迤邐轉回塘
南去高臺對苑墻
暖日旌旗春駐蹕
薫風殿閣晝生涼
別開水榭親魚鳥
下見平田熟稻粱
聖主一遊還一豫
居然清禁有江鄉

原匠倣書

涵元殿の東に藻韻樓あり。又東南に折て補桐書屋、隨安室あり。其東は待月軒、映碧亭。又涵元殿の西に綺思樓あり。又西を長春書屋、漱芳潤、綠光室、韻古堂とす。

韻古堂 乾隆十六年、江西より得たる古鑄鐘十一、帝に補鑄一を補ひて、韻古堂と名く。

古鑄鐘



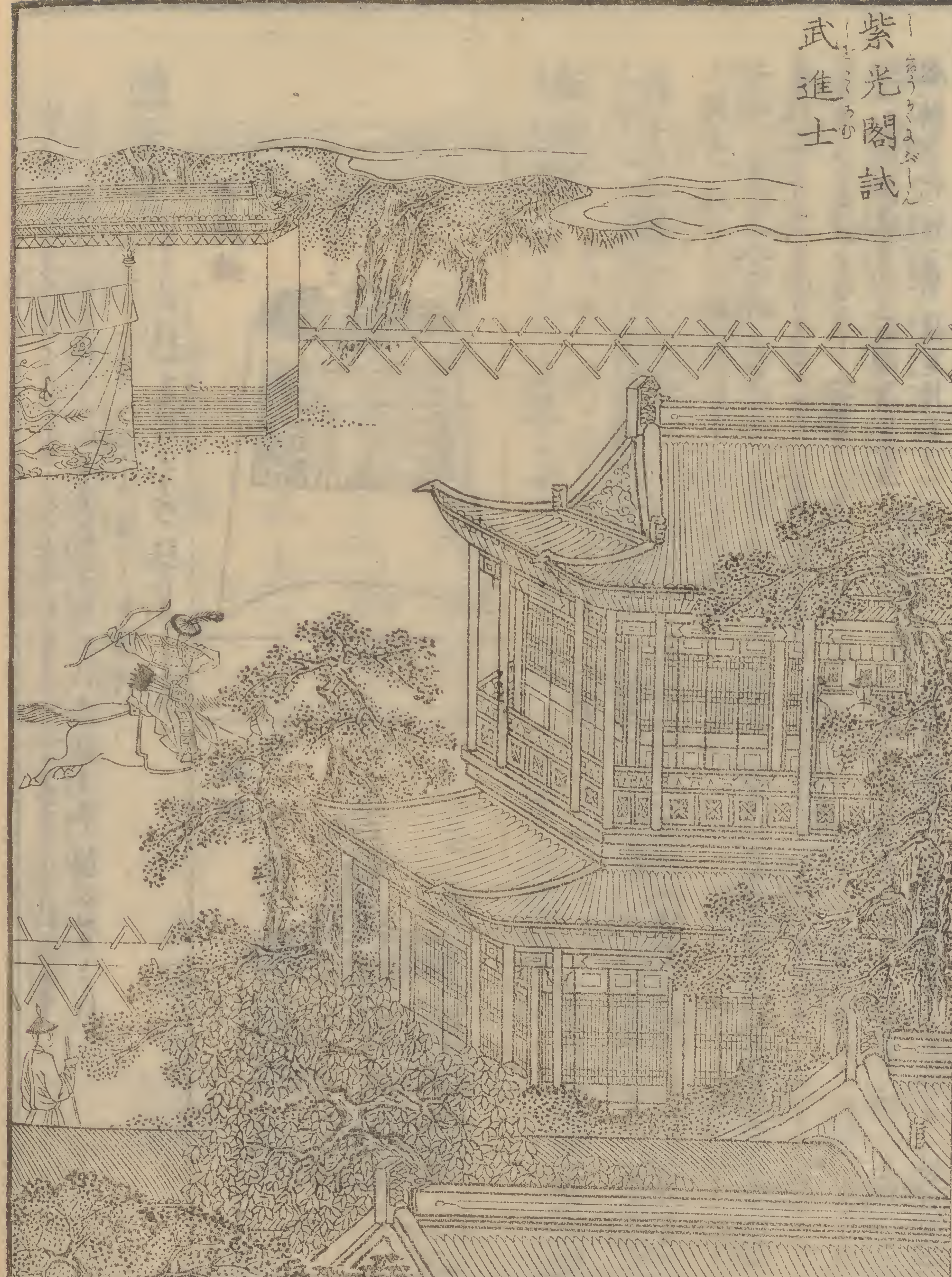
補鐘

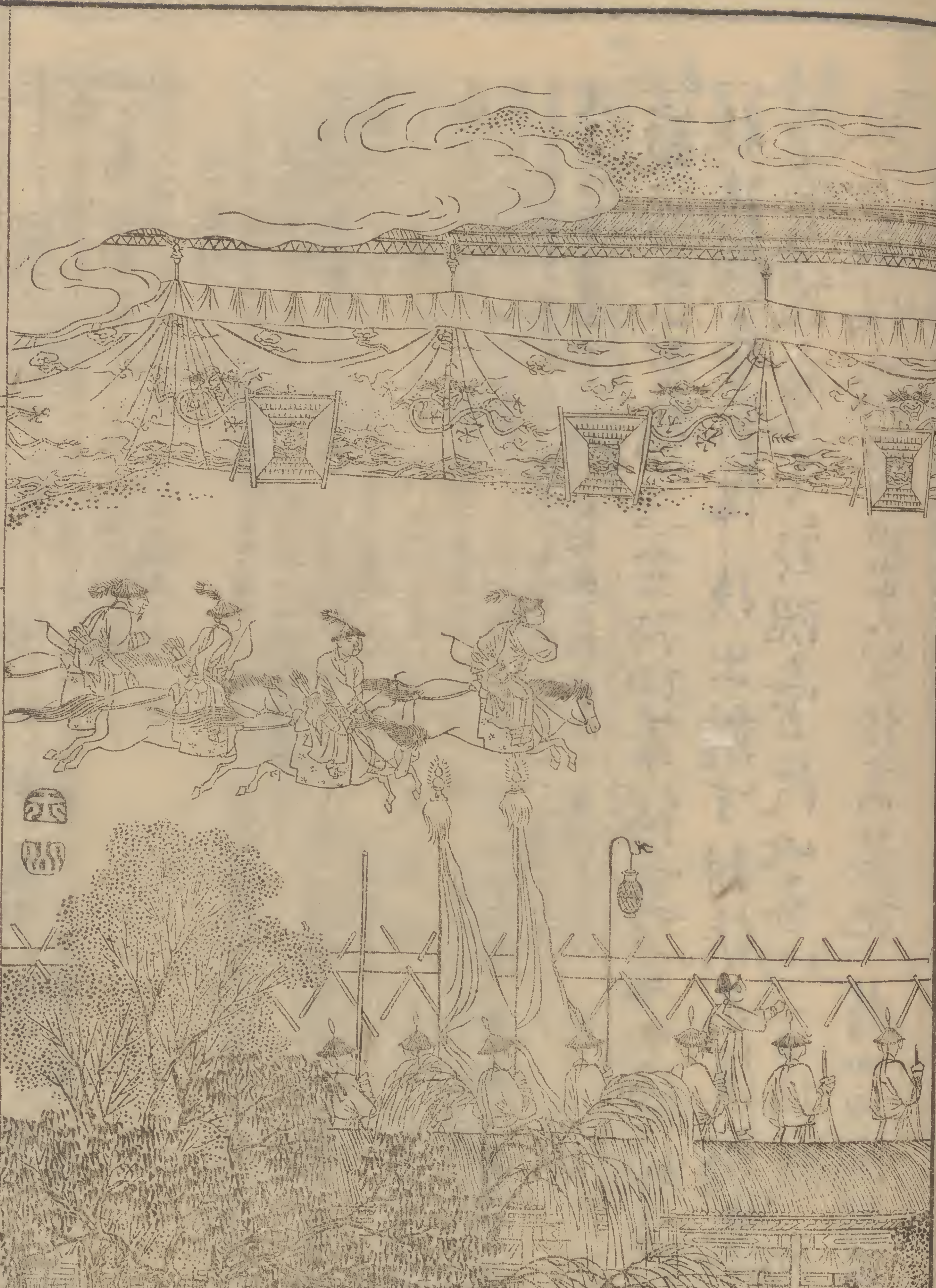


流杯亭 韻古堂の北、瀛臺門の東にあり。此亭流水にて曲水を繞らし、風漪水檻あり。康熙帝御題曲澗浮花といふ額あり。北に素尚齋、鄉雲廊、又天雪室あり。其乾隆帝御製の詩あり。○迎の岸を南に循ば日知閣あり。石を疊て堤とし、其下に閘あり。迎の水此より流出て織女橋に達る。又春及軒、蘊素齋あり。蓋春の南と賓竹室、藕香榭、漱芳閣、雲繪樓、韻綠齋とし。其清音閣の隣に漪へて南の方に月榭軒、韻古堂あり。○瀛臺の南池を望して桐蔭樓とよぶ。○瀛臺の南に寶月樓あり。懷叙殿、澄懷堂、北に遐矚樓、山字樓、雅殿、韓憩軒、純一齋、懷遠樓あり。

紫光閣 迎の西岸を循て北にあり。閣の前に殿あり。又進士の騎射を試む。前に外藩の使臣に宴し、此所明の時に至る。

豊澤園 仁曜門の西にあり。雍正帝、瀛耕の所に係り。○純秀亭にて仁曜門の西にあり。門內


紫光閣試
武進士



臺あり。又圓頂の小殿を施す。臺の下より斜に廊を接し、環級して升り下る。總れば村苑の馳道あり。明の武宗の帝是を築て、材を閲るの所とす。平臺とよぶ。後臺を廢して其所に紫光閣を建つ。門外は今數蕊坊なり。明の神宗の時の挙しく龍舟を闘はしめ、御馬監の勇士等を集て騎射を講ぜしむ。

明文徵明平臺詩

日上宮墻飛紫埃、先皇閲武有層臺。下方馳道依城盡、東面飛軒映水開。雲傍綺疏常不散、鳥窺仙仗去還來。金華待詔多頭白、欲賦長楊愧不才。

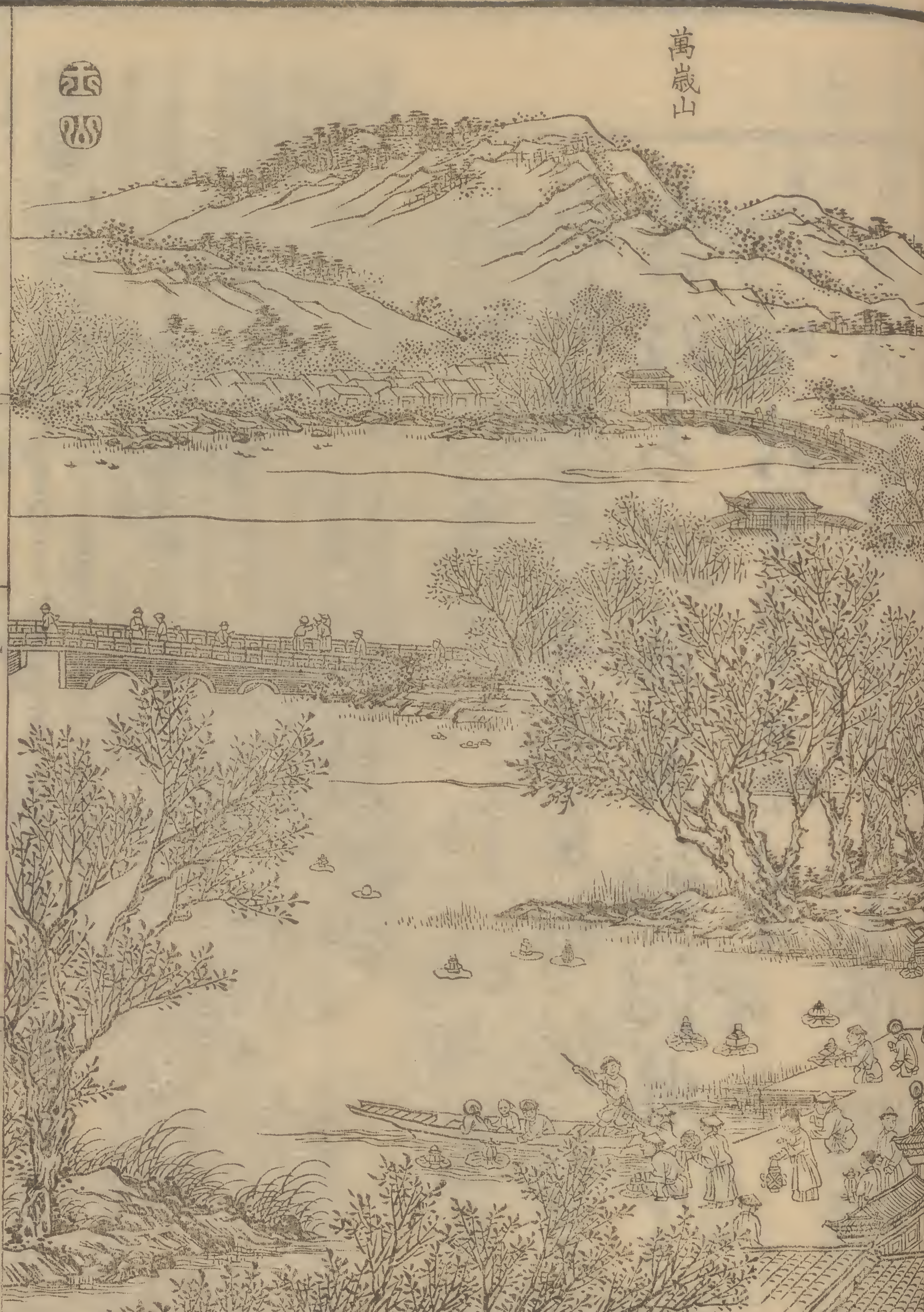
康熙間中秋の前二三日、上三旗の大臣侍衛を集めて射を試み、勝負を分けて是を賞す。射畢て、緞疋銀牌を賜ふ事あり。○乾隆庚辰回部を平定し、功臣五十人を紫光閣に繪かしむ。又戰の圖を壁に書く。丙甲の年、西金川紀を平定し、師を發し、伐て是を平定ぐ。前後の戰功ある臣百人を繪かしむ。又紫光閣の前楹に掲て、戰跡を繪かしむ。其前の功臣五十人は乾隆帝御製の贊あり。後の功臣五十人は詞臣に命じてこれを撰せしむ。師の還る時、功臣宴を此に設く。○武成殿は閣の後にあり。時應宮は閣の北にあり。丙甲の年、金川を伐てこれに勝。金川より獲る所の寶貴、纛、軍器の屬を武成殿に納め、門に武功をあらはし。

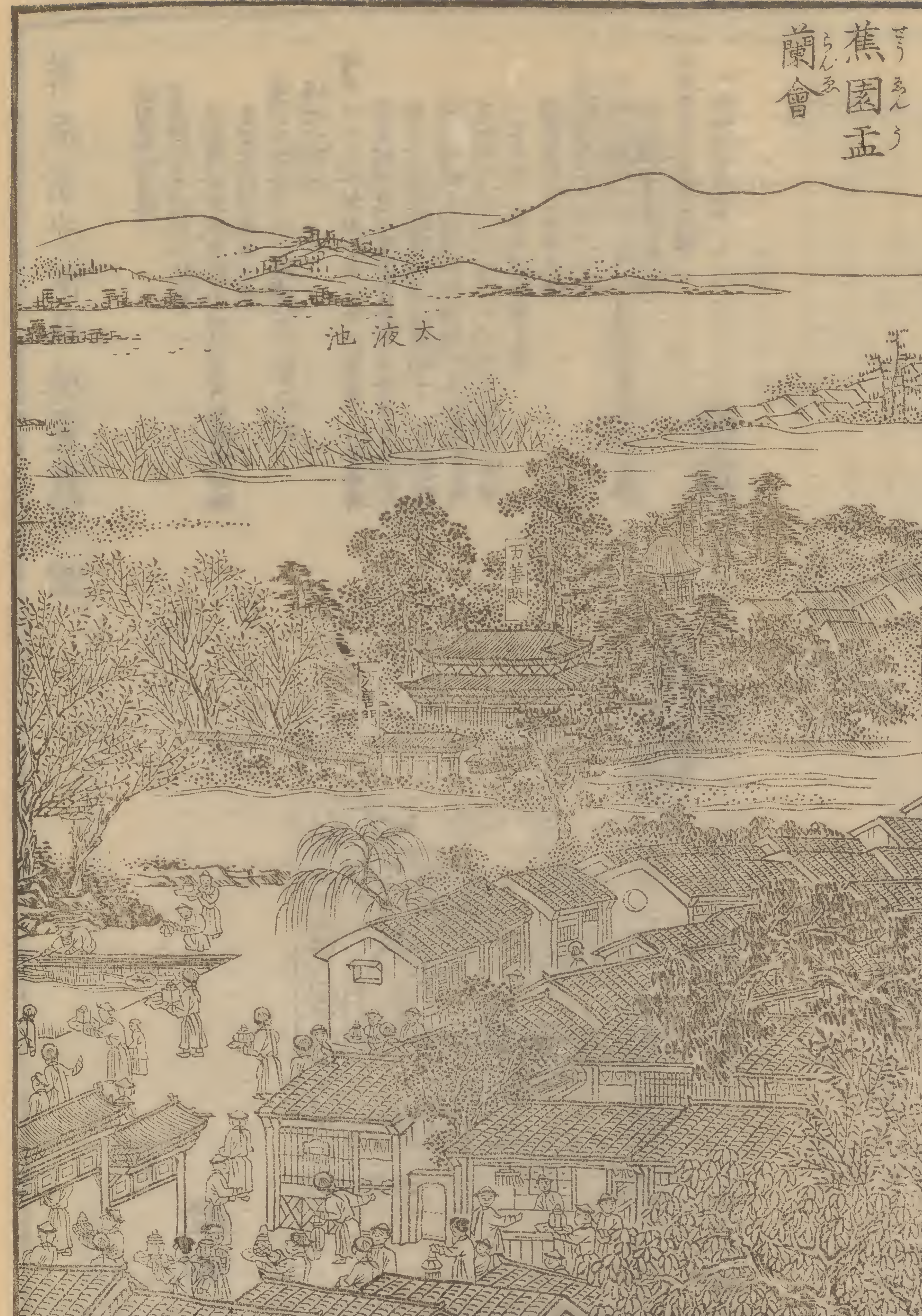
觀諸紫光閣上畫圖功臣[illegible]仰神[illegible]
收復絶域千折傳續出群才封侯不羨[illegible]
[illegible]
[illegible]紫光閣侍宴恭記　樗山田潤

尊藏紫光閣得勝靈纛之圖

御製尊藏得勝
靈纛於紫光閣詩以紀事
亭鄣靖金牙威宣載旆燧烽消洱海德表結旌
爰闢高閣以圓形並弆
靈旂為守器原夫一麾臨閫外彌文不侈
禡禨七宿炳
壇中壯志初傳鐃鼓方過祁連而壓陣千山風鶴騰
聲更驅既屬以揮軍百部沙虫掃跡昔也緬李
程刁斗遜是森羅今爲耀褒鄂弓　逾其英特
彼龍堆邀矢詎惟銅柱齊標而虎紐累然合與
金符同譜從此電霸生色非徒充武庫之儲遜
將日月承　欣永隸奉常之掌
麟閣圖形例紫光大師
靈纛並尊藏招摇伊吉資
神佑功績從今紀太常信是元戎薦忠悃肯忘群
力効疆場持盈知足懷
乾䝨敢復佳兵恃謐疆
乾隆庚辰孟春




萬歳山


蕉園玉蘭會
太液池
万善殿
蕉園

蕉園 西苑門より東岸を循りて北をさして蕉園といふ。松檜蒼翠として生ひ茂り、又果樹行列をなして羅布す。明乃崇智殿の舊址なり。萬善殿 蕉園の東、崇智殿の旧址の南、萬善門の内にあり。殿の後ハ宏寶殿といふ。園藻ハ全聖殿と称じ、東に延祥殿あり、西に集瑞殿あり。東ハ内監学堂といふ。順治乃間萬善殿に佛像を供し、内監の老なる者を剃髪せしめ此殿に焚修せしむ。又玉琳乃二僧召に應じて京に来り此所に居す。毎年七月十五日此に盂蘭盆会を修す。京師の民其日の暮ぶる頃より荷葉に燈を點じ太液池に浮め魂をたむけとうろう燈数千となりて夜すがら、南ハ瀛臺より北ハ萬歳山を繞て囲るくとりしびならざる所もるなし。実に苑中乃勝なるよし。萬善門の西ゆきつくして水埠乃東に亭あり。水中に在るなり。これを水雲榭といふ。乾隆帝御書の秋風乃に豈あり。燕京八景の一とし、水雲榭の北に金鰲玉蝀橋あり。

攜扶芭蕉色翠殊滿御園羊
腸便鹿夢青雨羅蜂緑結芙
蓉汪青交蘇荔翻詞林草
献頌此日重承恩 喧
廖道南蕉園詩

葛陂書

人字柳 太液池の畔に一株の柳樹あり。乾隆の間暴風ありて大きなる枝を吹折て地に伏せし枝に根を生じ、翠柳横に傾き欹側んとす。帝命じて其折たる枝を接して扶け起し、絲柳と競ふ。且其ぶり乃人の字に似たるをもって人字柳と名け、乾隆御製乃絃なしびに詩あり。



金鰲玉蝀橋 太液池を貫き東西両端に金鰲坊玉蝀坊あり。禁苑往来乃大石橋なり。九門あり。御製の額扁を勒し又御製乃詩あり。

承光殿　金鰲玉蝀橋の東にあり。圓城をなして圓く、睥睨を設け、両掖の洞門より升れば穹窿をなす金殿あり。即承光殿これなり。其形蓋のごとし。俗團殿と呼ぶ。庭上に栝あり。其槎枒として龍の如くなり。是金の時の遺樹なりといふ。乾隆帝御製の詩あり。○殿の基高く、睥睨につらなり、殿より少しく遥かに下を望めば、瀛池の西に舟を泛べて浚橋を渡り、池の南に亘る。北に万歳山後亭を望み、あふるゝと錦ぬ。○殿内蝙蝠多く住り。其大さ一尺許。○南に向ふて二の亭あり。雑標のごとに出づ。又承光殿の南に石亭あり。乾隆十年ここに建元の代玉甕を此に移む。御製玉甕の歌ならびに群臣の内に詞より内廷翰林の和詩を亭の柱に刻す。○承光殿後に敬躋堂・古籟堂・朵雲亭・餘清斎と云。北は積翠堆雲橋あり。

玉甕之圖

輟耕録云黒玉酒甕玉有白章随其形刻為魚獣出没波濤之状其大可貯酒三十餘石径四尺五寸高二尺圍圓一丈五尺至元二年告成勅置廣寒殿



積翠堆雲橋ともいへり。即金元の時の瓊華島なり。永安寺は則此にあり。瓊華島は太液

永安寺

池の中に踞り、高さ数十丈。瀧流・崖・嶂・奇木の良嶽の遺なり。元の時汴京より運び積む。今の燕京に移し築きし山なり。山の中腹に三の殿あり。延門を仁智殿といふ。左を介福殿、右を延和殿といふ。頂上には広寒殿といふ。

瓊華島之南面

永安寺の門に入て法輪殿あり。又引勝亭・涤霊亭あり。周りは石を畳みて洞とし、玲瓏宛転たり、面々良岳と移にもの是なり。洞を上れば雲依亭

意遠亭あり。其平なる所は正覚殿・普安殿・聖果殿・宗鏡殿あり。皆仏像を供す。其引勝亭の内には乾隆帝御製白塔記及び尼面記を勒す。○寺墻の東より山に升れば振芳亭あり。再升れば慧日亭。其西に順治間建る所白塔の碑記あり。○寺墻の西より山に升れば亭あり。蓬壺挹勝といふ。再び上れば悦心殿あり。其後を慶霄楼といふ。悦心殿の側に静憩軒あり。殿の後より山頂に登れば元の広寒殿の旧址なり。即白塔と此に建る。塔の前は善因殿。塔の後は刹竿五ところ。其下に信礟を納る所といふ。又山の左に漪瀾堂あり。春陰の寝宮を構ふ。即乾隆帝の宸翰燕京八景の一也。永安寺より慶霄楼に至て瓊山の南面とす。○瓊華島の山巓に古殿あり。遼の蕭后の梳粧臺なりといふ。然ども金元明の時皆此に宮殿を建て遊観の地とす。今其旧石礎あり。雲物皆広寒殿の旧をとどめり。元の納新が梳粧臺の詩に云、

廢苑鶯花盡　荒臺燕麥生　韶華如逝水　粉黛憶傾城　野菊金鈿小　秋潭玉鏡清　誰憐舊時月

曾向日邊明

此詩の註に云、梳粧臺は昭明観の後にあり。金の章宗嘗て李妃と夜臺上に坐す。上句に曰く、二人土上坐。妃のいはく、一月日邊明。上大に悦び、後に元の順宗其妃英格が為に耿芳殿を瓊華島の内に建つ。云　按ずるに今の章宗李宸妃がために梳粧臺を建て、遼の蕭后の梳粧楼といふは誤りなり。

瓊華島之西面

慶霄楼の西に石室あり。一房山といふ。山腰に亭あり。揖山亭といふ。其右に橋あり。橋の北を琳光殿といふ。亭あり。妙鬘雲峰と名く。石径をのぼれば水精域なり。林泉に臨む。甘露殿といふ。北に閲古楼あり。古蹟あり。其深さ測るべからず。乾隆帝御製の碑記あり。又水精域の下と甘露殿とは、北に閲古楼の壁上に三希法帖を嵌め、北より則ち前は澱室なり。窓は清池に依り、山渓を鑿てその古井の水を引き池中に注ぐ。又慶霄楼の西より畝鑑室に至る。瓊山の西面とす。

○山の右に廳あり。古井あり。其深さ測るべからず。伝へて云、下は海と通じ、内に龍ありて蟄すといふ。山中に石あり。慶雲寿峰萬変といふ。蓋良嶽の遺奇なる者なり。又幽なる石あり。先康の園の石松木水中に浸漬せるものなり。ひさしく化して石となるものなり。其木の理宛然として明かなる也。

瓊華島之北面　閲古樓より轉して東をれば則邀山亭・酣古堂・循石洞あり。洞の東に寫妙石室あり。其東に又洞あり。ゆく〳〵数歩、盤嵐精舎といふ。北に轉れば環碧樓あり。下を嵌巖室といふ。折て西に山亭あり。一壺天地と稱す。又西に房あり。延南薰と名く。房より上して西を小崑邱といふ。又西を洞、餐霞路といふ。洞中を經て仙人の庵を經まり、高房あり。又西を得性樓・延佳精舎・抱沖室・抹山書屋といふ。此上に至て象櫪に就く。廊あり。道寧齋に接る。其東は即ち漪瀾堂。北は瀛池にのぞむ。右延樓の東に盡て倚晴樓。西に盡て分涼閣・揮石照樓・遠帆閣あり。其間に漪瀾堂よりして東は蓮華室あり。太王を奉じた閲古樓より蓮華室にまで又瓊山の北面といふ。

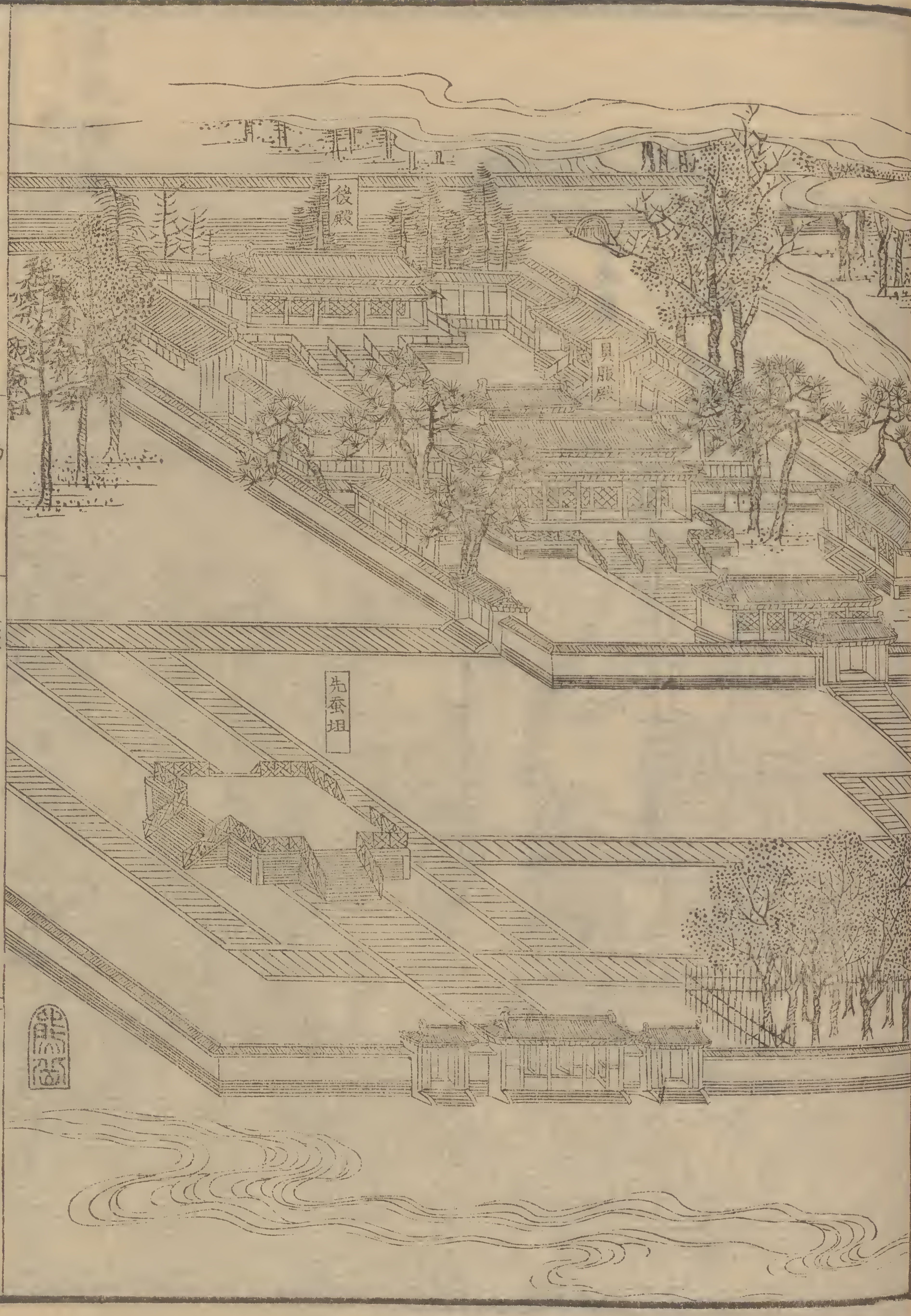
瓊華島之東面　石磴より山頂に登る所に看畫樓あり。是れ即ち交翠庭なり。庭下の石洞に緣て出る者を古遺堂・蟠山新亭といふ。堂下洞によりて出るものを見春亭といふ。又交翠庭より嶽路を出れば智珠殿あり。即ち半地に就く。元石磴より見春亭に至ると、瓊山の東面といふ。○山頂より白塔より東山の足に下るに智珠殿の山徑と春雨林塘といふ。亦て北をれば水を畫舫齋・小玲瓏・古柯庭・得性軒・抒風軒・叢翠・椒室・雲岫一丁・緑意廊といふ。北は即ち先蠶壇に接る。

五龍亭　太液池の北にあり。中を龍澤といふ。左を澄祥といふ、凝香といふ。右を湧瑞といふ、滋香といふ。總名して五龍亭と唱ふ。○明の時、太液池の北に殿樓亭軒多く建てしが、今悉く廢して、惟金澤橋を存す。

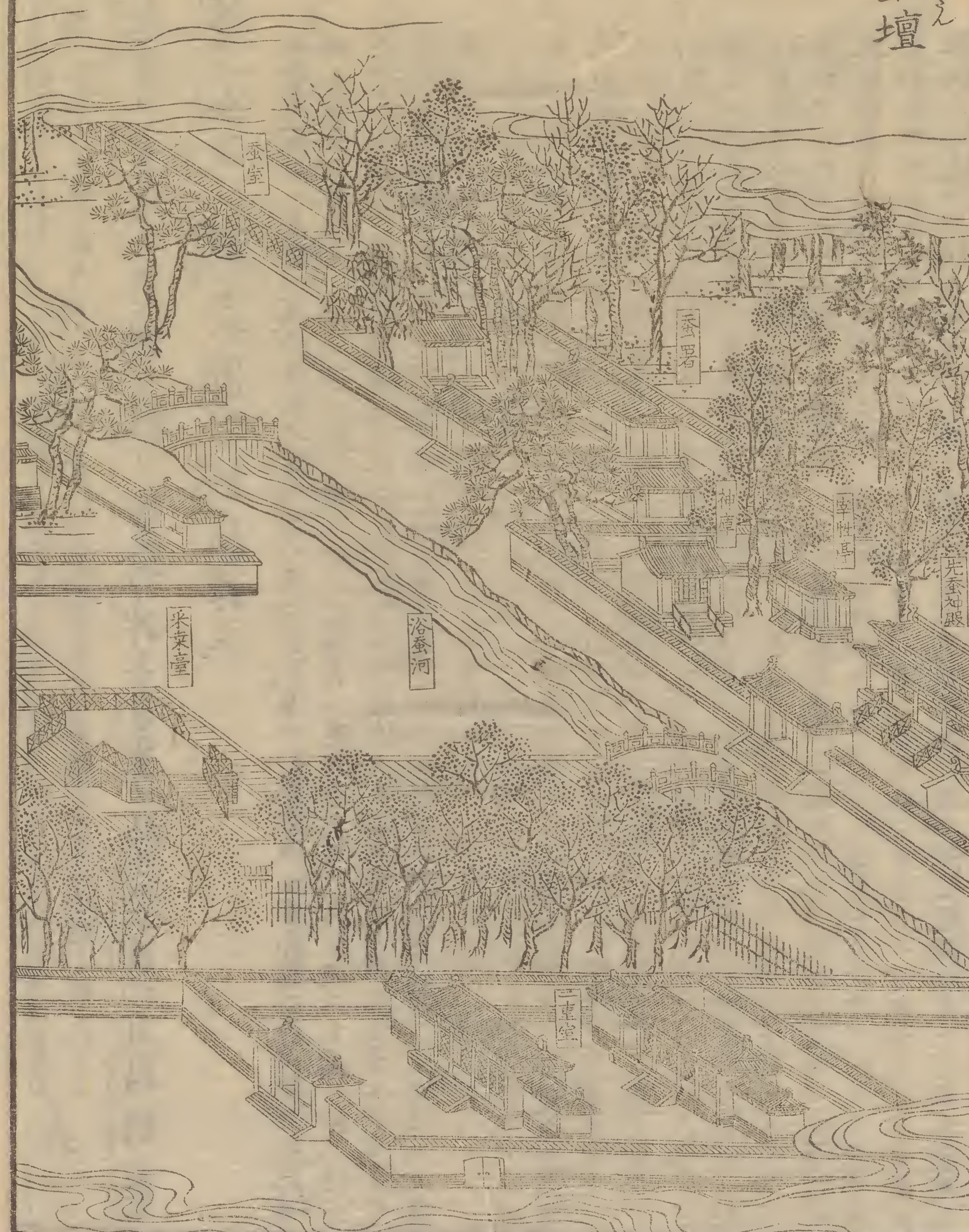
先蠶壇　西苑東北の隅にあり。其壇の制方なり。南にむかふ。壇は高四尺、方四丈、四出陛あり。各十級。西北を瘞坎壇といふ。**先蠶神殿**　壇の東南にあり。西に向ひ廣三間。朱の扉緑の瑠璃瓦をもて覆ひ、基高く三の陛あり。殿の東に宰牲亭あり。右に井亭あり。**神庫**　殿の北にあり。**神廚**　殿の南にあり。おの〳〵三間。**採桑臺**　壇の東にあり。廣三丈二尺、高四尺。其臺の面金甎を敷き、三圍むに白石をもてし、南・東・西の三方に陛あり。各十級。桑園を繞し、東は即ち桑の園なり。**具服殿**　採桑臺の後にあり。廣五間、南に向ひ、三の陛あり。各又級。東西に配殿あり。各三間。方に回廊を備へ、凡三十間。**浴蠶河**　宮牆の東にあり。外園北垣より流れて南垣より出づ。垣の上に閘あり。啓閉を為し、木橋二を跨ぐ。**蠶署**　橋の東にあり。宮牆東・南・西三方に各一門あり。

蠶室　蠶署の北に建る。二十七間各均しく西に向ふ。**壇垣**　周百六十丈。西南の隅に正門あり。門三、左右の小門各一。又西北の隅に角門あり。壇垣南の外に室二重あり。各又間。均く西にむかふ。**毎歳**季春吉巳に皇后この壇に詣し、蠶の神を祭り給ふ。其次の日、再躬桑を採り、女子に蠶の道を教ひ給ふ。

凡饗先蠶之礼、為壇一成於西苑之東北、歳以季春吉巳、皇后躬親蠶事、迺饗先蠶之神以率女紅、先蠶神位南嚮、設黃幄帛一牛一羊一豕一登一鉶一簠簋各二、籩豆各十、尊一爵三琖三十鑪一鐙二、豫日樂部率掌儀司内監、設樂於壇下左右、祭日鑾儀衛率内監陳皇后儀駕於順貞門外、辰時五刻太常卿暨内務府總管、詣乾清門告時、宮殿監督領侍轉奏皇后、礼服乘鳳輿出宮、儀駕前導、陪祀妃嬪咸乘輿從、由順貞門神武門北上門入陟山門、至壇門外降輿、前引女官十人、贊引女官二人、恭導皇后由左門入、至具服殿、妃嬪入配殿、恭候、傳贊女官引公主福晋命婦、位於壇下東西面、蠶宮令恭請先蠶神位、安奉黃幄畢、相儀女官奏請行礼、皇后出具服殿盥洗、妃嬪隨行、贊引女官恭導皇后由午階陞壇、至黃幄次拜位前北嚮立、前引女官十人於階下兩旁序立、相儀女官二人隨升壇左右稍後僉立、傳贊女官引陪祀妃嬪公主福晋命婦於壇下、各就位序立、均北面、典儀女官贊執事官各共迺職、贊引奏就位、皇后就拜位立、迺瘞毛血迎神、司香女官奉香盤進、司樂女官贊舉迎神樂、奏庥平之章、贊引奏就上香位、恭導皇后詣香案前、司香女官跪進香、贊引奏跪、皇后跪、奏上香、皇后上柱香、次三上瓣香、奏復位、皇后復位、奏跪拜興、皇后行六肅三跪三拜礼、妃嬪以下均隨行礼、奠帛行初獻礼、司帛女官奉篚、司爵女官奉爵詣神位前、奏承平之章、司帛跪奠帛一叩、司爵跪獻爵奠於左、儀如初獻、行終獻礼、奏齊平之章、司爵跪獻爵奠於右、儀如亞獻、樂止、女官一人贊答福胙、奉福胙女官二人就東案奉福胙、至神位前拱舉、降立於皇后拜位之右、受福胙女官二人進立於左、皇后跪、左右執事女官皆跪、右官進福酒、皇后受爵拱舉、授左官、進胙受胙亦如之、行二拜礼、興、率妃嬪以下行四肅二跪二拜礼、徹饌、奏[illegible]平之章、徹饌畢、送



先蠶壇（せんさんだん）



皇后躬桑





神奏洽平之章、皇后率妃嬪以下行六粛三跪三拜礼。執事女官奉帛、次饌次香。恭送瘞所。皇后轉立拜位、旁西獨候帛饌過復位。詣望瘞樂作。恭導皇后降階、詣望瘞位望瘞。奏礼成。恭導皇后至具服殿更衣。蠶宮令恭奉神位還御。皇帝乗輿還宮。妃嬪從公主福晋命婦以次退。翌日行躬桑礼。

○躬桑之礼、及遣妃代行礼之文、以繁略之。

○蠶壇より北に近く西北に行けば澂清齋 抱素書屋 韻琴齋 鴉菜鳩窩 畫軒 枕巒亭等あり 其繞清齋より北に至りて西南にそれば西天梵境と名る所あり 殿は三層なり 又大西天ともいへり

闡福寺

五龍亭の北にあり 又極樂世界と名く 乾隆十一年に建つ 萬佛樓あり 小銅佛一万尊を安ず 殿内には白傘蓋の佛を安ず 佛のたけ数十丈 俗是を大佛と称す 御製の碑あり

闡福寺の東に澂觀堂 澂性堂 慶雲堂 致爽樓 浴蘭軒 鏡藻軒 湛碧亭 澹吟室 清緒池等あり 西に門あり 外欄に通ず これを陽澤門といふ

鐵源局

萬壽寺の後にありしを近き頃萬歳山の西に移す ○総及び其余の物材を浙江より来しみ先絡繹の主換を定め 式のごとく鐵造て 殿屋より舊殿を撤げ 新殿は闌を呈し

延壽菴

三坐門の北 東房夾道の西にあり 康熙間重修す 明の嘉靖の年にも修す 一ありし 是に延壽菴あり 及内府安樂堂 佛堂永遠供奉の字を揚ぐ 是安樂堂は西内經廠にあり 延壽菴は

則安樂堂の佛堂なり

經板庫

延壽菴の稍西にあり

内府の安樂堂は今は廢す 明の時 宮女の年老たるは雑病ある者ゆへ 者は哀れ摂り 起き 明の尚衣監 等は再び浣衣局にて送らる その間に 萬歳妃寵を受る 安樂堂にて 死しきを葬るに 及其附に孝穆紀皇后婦となりあり 闌室兆が弱なりけるを 罹ちて廢所に託して安樂堂に居らしくして孝宗帝を生り

闡福寺大佛

日本乃皇都東山大佛方廣寺の前に蓮華王院ありて三萬餘の佛像を供ふる處に圖する闡福寺の白傘蓋佛も大佛の名ありて萬佛樓に萬尊の小銅佛を供ふるの謂に我朝の大佛殿三十三間堂と彷彿たり



○眞武殿　筆房交於進西酒醋局巷にあり。今酒房と称す。明の西酒房の旧址なり。

明の時、金鼇玉蝀橋の西に玉熙宮あり。世宗皇帝嘉靖に十年萬壽宮災ありて、しばらく此宮に御坐ましましたり。其後神宗皇帝萬暦の間、近侍三百餘人をえらミ、玉熙宮に雑劇を習はしめ給ふ。劇の詞ひとつのあり。或ハ盛世新声・雍熙楽府、或ハ詞林摘艶など、其中の類名なり。又玉蛾児と題せるあり。来りたる唱歌なりしかバ、梨園の人物しれるべし。ぬ倣て題して御製に景玉児郎と名づく。其外過錦・雑劇の属ひありて、正月元日にこれを演ず。その劇をうたふにも、或ハ明皇の聖代、暴主の苛政、忠良の行ひ、逆臣の叛謀、列女・英婦の故事、又はいやしき男女の女商賈の生業、娼女の痴情など、あまねくあらはして、これハあはれ、或ハ嬉し、事に感じ信義のかゝる操に感あり、又ハ暴逆の乱を見るあり、ときのまに勝りあり。とかく世にあらゆるさまの事をうつして、ならはせ給ふ。劇をうたはしめ給ふ。かの金殿玉樓の中に居まして民間の憂苦を知り、御代の久しかるべき助けにとて、漢の農業耕織の圖を玉殿の壁に画しめ、民の辛苦を忘れ給はざりし意遠なるべし。崇禎の帝つねに此殿に御幸ありて過錦・水嬉の戯ミ給ひしに、一日汴京に寄すりし帝の故事をあやまりて人のなげかしめ、ほどけなくきこえ給ひしに、其日の劇は則止みて、此殿に幸し給ふを不祥の例なりとて再び御幸ましまさず。明の曹靜が照宮の詞あり。

口勅傳宣幸玉熙。樂工先候九龍池。雑成傀儡新番戯。盡日簾開看水嬉。

○蠶池　三座門街の東南にあり。西苑に隣まり。明の宮人蠶を織しところなり。　○蔡珩元宅地　蠶池の北の巷元が邸宅の舊址なり。

元後居蠶池養疾。恭紀。皇時

終身去宿病。後家妻子盡歡。歌平分翠色瀛臺柳。依舊清光太液波。深院自驅塵騒少。廣庭偏受月明多。那知天上蓬萊島。長作人間安樂窩。　○天主堂　○琉璃作

側に蠶池口。　○永佑廟　西安門内御茶殿の西にあり。雍正九年に建つ。雍正帝と祀る。雍正帝御額の額あり。內革廟にあり。

○大光明殿　永佑廟の西、光明殿胡同にあり。明の萬壽宮の地なり。嘉靖年間建つ。雍正乾隆年間両度修す。乾隆帝御書の扁額あり。両壽宮は三清殿・三元殿・慈佑殿・慈濟殿あり。乾隆間添て建らる。御製の詩あり。○大光明殿の地ほて殿を含り。門を登豊門といふ。其前に圓殿あり。高さ数丈光を顕して大光明殿と稱す。中なる殿を太極殿といふ。其後を天元閣といふ。皆ミづから登べからず。屋を覆ひあやに文ある石にもりて、砌とすゞし丹楹に金を飾らせし。龍の繞ぐ登るさまを作りふう。陛は右面と三位に設け、殿内には七寶雲龍の牌位を安し。上帝と祀らる。旅人て云、明の世宗帝、陶眞人と丹薬をいたり、今は内監道士を設て守る。○高士奇宅地　光明殿胡同にあり。高士奇字ハ澹人、浙江海寧の人なり。欽賜翰林官詹事に至る。嘗て扈駕帰田なるの集を著す。

賜居西苑自城北移家詩　高士奇

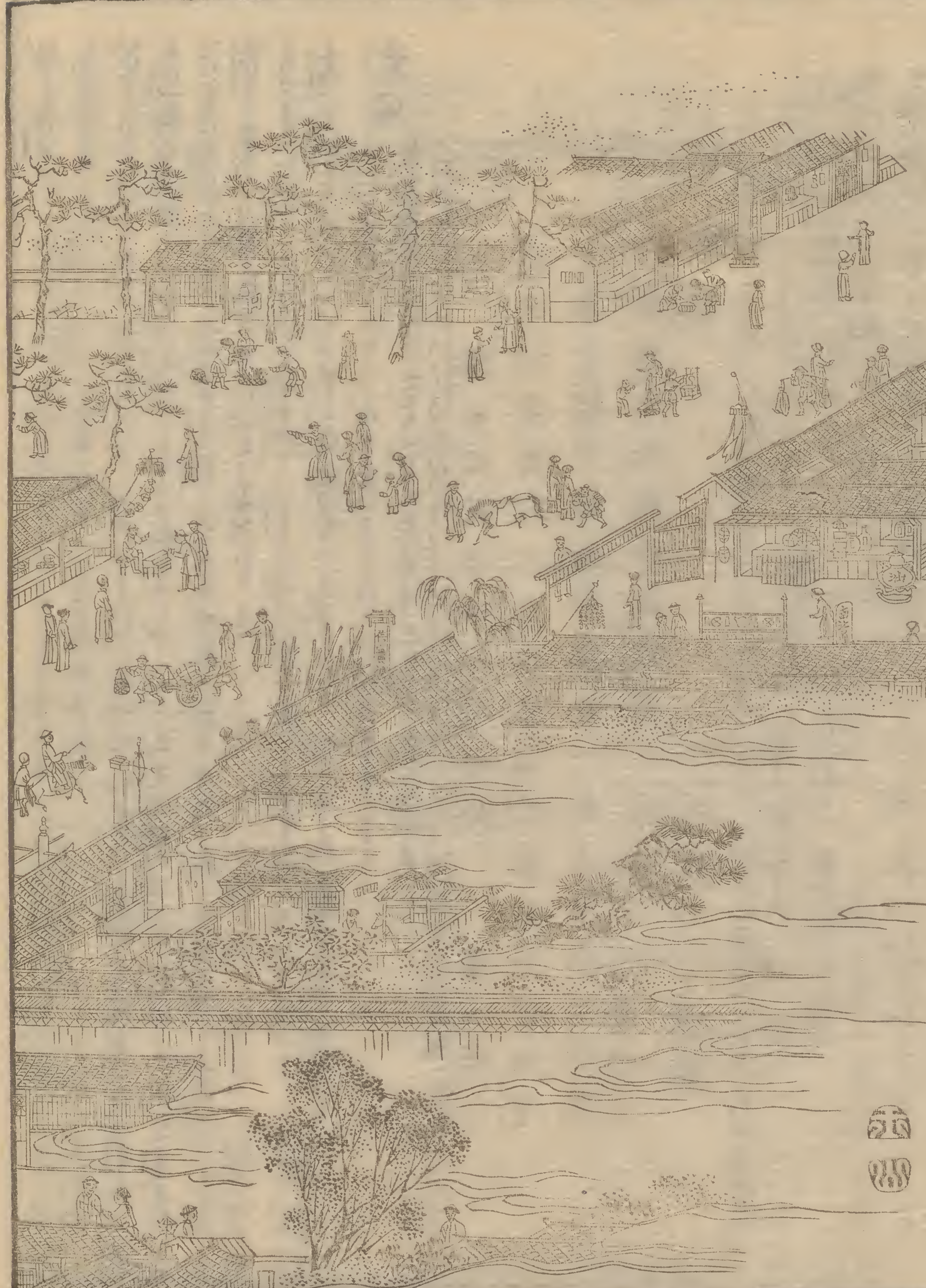
客中陋巷為家久。忽訝恩輝住苑西。牛背馱書千巻重。擔頭挑樹両株齊。門前金碧瞻天闕。屋内鶯龍有御題。仲蔚蓬蒿十年事。一枝偏借上林棲。

荒鳴門書

○巧織營　門外にあり。明の雲機廟の故址なり。　○壽明殿　巧織營の南にあり。明の稱升殿なり。乾隆間重修。

明代瀛臺の西に兔園山あり。又兔児山と号し、或ハ小山子とも名く。大光明殿の南にあり。石を畳ミてつくりし山にて、洞をぬせり。東西に径あり、紆折て頂に登る。れば清虚殿といふ殿のありしとなり


西安門
慈雲寺
西安門



祠甕を贍し設け、其中へ山中の水を灌ぎ曲流して池に注ぐ。池辺多く奇石怪岩を並べ立てたり。名けて小蓬萊と称す。其南は瑶景亭・翠芳亭なり。此より古木参差として〈へ石塚〉と號して東西の二池に通ず。梁の間を旋磨甚だしく縈紆して上れば其巓に陶を甃て池とし其水龍の口より倣へて云。明の世宗帝此に北斗を拝し給ふ。此山元の時築く所なり。元人此奇石を載して燕京に移す。其一石を采蘭若干と似てこれに準じ綴て俗に祈禱石と呼ぶとかや。明の時重陽の節には天子萬歳山或は兎児山の清虚殿に幸し給ひ、内臣皆菊花の補服を衣し、帝を供奉し迎霜兎菊花酒を喫らるとなり。

○火藥局　拝斗殿の西にあり。即明の兎児山旋波臺の地なり。

西安門　皇城の西門なり。景山と相對す。○二聖廟　十庫にあり。十庫は西安門内街の北の極なり。即明の翁字房の地の祠なり。康熙帝御書の額あり。○慈雲寺　旧西にあり。明の十庫なり。天王殿の址なり。門の額は康熙帝御書。又乾隆帝御製の詩碑あり。

西十庫は西安門内にありて南に向ひ古く堂庫を設く。十庫と名るは十干の名に命して甲乙丙丁戊より以下は別の名に改む。以は己の己なればなるべし。戊以下の名は兼運と云。廣恵と云。廣盈と云。廣積と云。贓罰と云。清の初年庫を封じて閉くるなし。塵積て甚だ擁くありしを康熙年間内務府に命して清察せしめ庫の器業を査られたり。

○元都勝境　陽澤門小馬圃の西にあり。此地を乾隆帝重修して名を天慶寺と号す。又御書額帯に劉鑾塑像の詩あり。○劉鑾は元の人なり。嘗て阿爾尼格と云者に従ひ西天の梵相を学び妙手の名ありし。正殿には玉皇大帝の像を安し、右の殿には三清像を塑し、儀容肅穆、道気深沈たり。左の殿には三元帝君を塑し、どこえ帝簿を執り首を傾け聞て然る所あるがごとし。一隻の跪く者あり。其様戦慄たり。二堂の中皆慄懼愁憫する者のごとし。神は勅を給ふを知て聞者に似たり。皆劉鑾が塑する所なり。

○弘仁寺　太液池南の岸にあり。明の代の清馥殿なり。清乃康熙五年改て寺とし、旃檀佛像を迎て内に安す。康熙帝並び乾隆帝御書の碑あり。又康熙帝御製旃檀佛西来歴代傳の記あり。石に勒す。寺の後に樓あり。雲蔭樓と云。○清馥殿は金鰲玉蝀橋を至り北に渉る所なり。明の世宗帝の建させ給ふ所なり。帝嘗て興献太后を奉じて此殿に遊び給ふ。池の邊には翠芳亭及び錦芳亭あり。夏月荷花ひらきを開く比、多くの宮女舟にのりてや若くは羅の蓋をとりて岸によりて徜徊するさま、倒に池の面に映じける。阿蘇は蓬壺の仙會に似たり。

○虎城　弘仁寺の後にあり。其西北の隅に豹房・百獣房ありしが今は廃る。○若虎城と號、櫺星門の西北にあり。上に暁門あり。下に階あり。其上に鐵網を以て籠のごとく是内に虎を養ふ。

○教軍場　弘仁寺の西闡福寺の垣の後にあり。即明の内教場なり。嘉靖三十一年始めて内殿営を名付、火器・水芟・騎馬を祀る中に一の甚臺を建て是を親閲の所とす。

地安門　皇城の北大門なり。景山の北にあり。俗呼で厚載門と云。北は鼓樓に對す。

右皇城の壇廟・署営・寺祠及び名勝故跡をことごとく載て漏るゝなし。唯番勝寺・伽藍寺・火神廟・慈慧寺・真武廟・二玉皇廟・饅頭房・雙印寺・仁壽寺・大佛堂等併せて十一箇處傳記の詳らべきなきを以て皆本文に略す。

明の時皇城の四方・大清門・左右長安門・東安門・西安門・地安門等夜の初更に鑰を入れて禁じ、夜巡の軍人銅鈴を揺振て終夜攀遷せり。清朝に至りて皇城の内居民甚稠く、東安・西安・地安の三門閉て鎖す。居民あるひは醫を請じ、穏婆を迎る等のことあれば時候に拘はらず出入す。

唐土名勝圖會巻之二終